

日 本 の 点 字

第 45 号

— 日本の点字制定130周年特集号 —

目 次

視覚障害者のための点字からみんなのための点字へ …… 青松 利明 …	1
日本点字に関する略年表 ……	10
「日本の点字制定130周年記念講演会」開催 ……	13
点字は私の父、指点字は私の母 （福島 智）	
＜暁天の星＞から＜満天の星＞へー点字をめぐる不易・流行ー （岸 博実）	
日本点字制定130周年に寄せて ……	33
点字が点字になるために（木下 知威）	
紙の点字からデジタルへ（浅川 智恵子）	
点字にまつわる三つの危惧（大藪 真知子）	
点訳者から教える立場になって考えること（渡邊 寛子）	
点字とともに（高洲 由美子）	
点字に感謝（松浦 敬子）	
第56回総会、および研究協議会報告 ……	45
編集後記 ……	50

2021年3月

日 本 点 字 委 員 会

視覚障害者のための点字からみんなのための点字へ

日本点字委員会委員

筑波大学附属視覚特別支援学校教諭 青松 利明

1. はじめに

私は小学校1年生から盲学校に通い、そこで初めて点字と出会いました。自分で文字が読めることがうれしくて、先生方のご指導もあり、あっという間に基本的なことは覚えたと思います。それから40数年、毎日のように点字と付き合ってきました。本稿では、その点字との付き合いとそこから学んだこと、感じていることを述べたいと思います。

2. 点字の基礎・基本

点字を覚えた小学校低学年の頃は、日記を書いていくと担任の先生がその内容を読んで、評価とコメントを書いてくださいました。評価は五重丸まであり、点字では「め」の数でわかるようになっていました。良い評価をもらえるように、そして先生からのコメントを楽しみに、毎日せっせとたわいもないことを書いていました。また、五十音を書くことや「め」打ちが速くなるように、毎日時間を計ってもらい、練習したことも覚えています。そのうちにパーキンスブレイラーやカニタイプと呼ばれるライトブレイラーの使い方も指導していただきました。手で書くのとは違い、音はうるさいですが、とても速く書けたり、紙を外さずにすぐに読み返せたりできることはとても便利でした。特に算数の計算の確認がしやすかったりしたことを思い出します。その他にも、はがきや手紙の書き方、ノートのファイルの仕方等、点字の基礎・基本を習うことができました。このことは、学習や生活において、その後もずっと役立つ土台となりました。

3. 6点漢字との出会いと亜鉛板製版との格闘

中学校からは地元の奈良県を離れ、東京にある筑波大学附属盲学校で学びました。中学部時代の点字に関する思い出は二つあります。一つ目は当時理療科で教鞭を取ら

れていた長谷川先生から直接長谷川式6点漢字を学んだことです。まだ、パソコンから音声が出る前でしたが、点字タイプライターを使って、6点漢字を書く練習をしました。そして、中3の夏休みに太宰治の「走れメロス」という小説の全文を、点字から6点漢字に書き起こしました。一文字ずつ一覧表から探して、1か月かかってやっと書き上げたときは大きな達成感がありました。夏休みの最後の2日間、長谷川先生の指導の下、ボランティアの方に画面に出る文字を確認していただきながら、紙に書いた6点漢字をすべてコンピュータに入力して、墨字で印刷をしました。長谷川先生の言葉を借りれば、「自動代筆」を体験することができたわけです。この時、点字を用いて漢字仮名交じり文を正確に書くことができたことは、大きな自信となりました。今ではスクリーンリーダーが発達し、ローマ字入力ができれば、合成音声で変換候補を聞きながら簡単に墨字文章を書くことができます。しかし、それができなかった頃、6点漢字を通じて漢字の音読みや訓読み、送り仮名、適切な漢字の選び方などを学ぶことができ、点字を通じて漢字文化に関する大きな財産を得ることができました。

もう一つの思い出は、一人で260ページの卒業文集を亜鉛板製版したことです。放課後の時間を使い、毎日友人に原稿を読み上げてもらいながら、ひたすら亜鉛板に点字を書きました。点字プリンタや点字エディタなどが存在しない時代ですから、同じ内容の冊子を何部も印刷するにはこの方法が最適だったわけです。そんな昔話を今の中学生にしても想像しにくいことだとは思いますが、青春時代の思い出の1ページです。点字本や点字教科書を作ってくださっている方々の苦勞を体験することができ、多くの人の支えがあって学習や読書ができていることを痛感しました。

4. アメリカ留学と受験勉強

高等部時代の点字の思い出は、1985年から10か月間、アメリカの高校へ留学したことと関係します。ちょうどそれまでは墨字の小さな英和辞典が点字で27巻だったのですが、点字で100巻の英和辞典が新しく出版された頃でした。しかし、さすがに100巻の点字辞書を持ってアメリカに行くことは難しいと思いました。そこで、ポケットサイズの墨字の英和辞典で日本語の部分はすべてローマ字で書かれているものを買って渡米しました。その辞書を使うには二つ方法がありました。一つはホストファミリーや高校の先生にその辞書を引いて読んでもらう方法、もう一つはオプタコンを使う方

法です。

オプタコンとは右手で小さなカメラを操作し、印刷物の上をなぞると左手の人差し指を置いた触知盤が144本のピンの必要な部分を振動させ一文字ずつ触覚的に墨字の字形を指先に伝えてくれる装置です。現在のようにインターネット検索や文字認識ソフトが発達していなかったため、当時はこのオプタコンを使いこなすことで情報へのアクセスが飛躍的に広がりました。

アメリカ人にローマ字で書かれた日本語を読み上げてもらう方法は便利なようですが、なかなかきちんと聞き取れず苦勞しました。一方、オプタコンは単語一つの意味を読み取るにもかなり時間がかかりました。結局簡単な英語だけで具体例を挙げながら説明してもらう方が速いように感じました。

今では、コンパクトな点字ディスプレイに10冊以上もの点訳された辞書データを入れ、簡単に点字で辞書検索ができるようになり、テクノロジーの発達と開発者に感謝の気持ちでいっぱいです。アメリカに留学した頃にそのようなシステムがあれば、もっと自由に学習できたのではないかと感じます。しかし、そのような環境ではなかったからこそ、新しい英単語を覚える時には一度覚えたら二度と忘れないつもりで集中できたのだと思います。

アメリカでの点字に関係するもう一つの体験は、数学の点字が全く違うことでした。ネメスコードという点字で、イコールが「4・6の点に1・3の点」だったり、2乗の記号が「1・2・6の点」ではなく、「4・5の点に2・3の点」でした。英語もわからないのに点字もわからずしばらく苦勞した思い出があります。しかし、点字そのものが6点からできていることは変わらず、仕組みさえわかれば読めるわけですから、次第に理解できるようになりました。一方、楽譜については、少し違う部分もありましたが、ほとんど問題なく読め、ピアノを習ったりする時も問題ありませんでした。文字や記号の示し方が異なることはありますが、どんな言語であっても、どんな分野であっても、六つの点で表される点字の共通性、多様性、普遍性を実感したものです。

当時は電子メールやSNSなどない時代で、国際電話も値段が高く、日本とのリアルタイムの連絡は全くできませんでした。日本に点字で手紙を書いても往復2週間以上かかり、たまに家族や友人から点字の手紙が届くととてもうれしかったことを覚え

ています。エアメールで届いた手紙を，人に頼らず自分の力で読むことができ，点字のすばらしさを再認識できました。

留学生活以外に高校時代には受験勉強の思い出があります。点字プリンタはありませんでしたので，ボランティアの方に点訳していただいた予備校のテキストを，友人と協力しサーモフォームの機械（紙に書かれた点字や点図の上に専用シートをかぶせ熱処理することで複製を作る装置）を使って1枚1枚複写していました。点字用紙に比べ摩擦が大きいサーモフォームのシートで読むのはとても疲れますが，簡単に複写するにはその方法しかありませんでしたので，予備校の授業に間に合うように一生懸命作業をしました。受験勉強の環境を整えることに満足して，どの程度学習が身に付いたかは不明ですが，その昔1冊しかない点字教科書をクラスの全員が読むためにすべて転写していた大先輩のことを思うと，ずいぶん楽をさせていただいたと思います。

5. ヨーロッパの点字ディスプレイと点訳のアルバイト

大学時代にもいろいろ思い出があります。1991年，大学3年生の夏，ドイツやオランダにある点字ディスプレイの開発メーカーを5社ほど訪問しました。そこでの衝撃は今でも忘れません。まず，日本ではまだほとんど普及していなかった点字ディスプレイの会社がいくつもあることには衝撃を受けました。そして，点字ディスプレイがあることで，視覚障害者の学ぶ機会や職域が大きく広がっていること，学習や仕事をする目的であれば政府から点字ディスプレイが無償で提供される国もあることなどを知りました。

点字ディスプレイそのものの機能にも驚きました。今では当たり前の機能ですが，読んでいる文字のマスの上にある小さなスイッチを押すとすぐにカーソルがその場所に自動的に移動する（カーソル・ルーティング機能）がありました。この機能があることで，作業の効率が格段に上がります。カーソル・ルーティング・スイッチの代わりに光センサーを使っており，反応が極めて速いものもありました。また，20マス，40マス，80マスと様々なマス数の点字ディスプレイがあり，日常生活・学習・仕事など，場面や内容によって使い分けていることがわかりました。さらに，文字を読むだけでなく，画面のレイアウトを確認するためのグラフィック点字ディスプレイも開発されており，日本での開発状況に比べるとかなり進んでいることに愕然としました。

国の予算による手厚い支援があるからこそ、いくつもの点字ディスプレイの開発メーカーがあり、競争しながらそれぞれが使いやすい魅力的な点字ディスプレイを開発していることがわかりました。日本でももっとこの分野での開発や公的支援が進むことを期待したものです。そして、コンピュータ分野であれば、点字ディスプレイを使うことで、視覚障害者も事務仕事やシステム開発などで、健常者と同等に近い仕事あるいはそれ以上の仕事ができるのではないかと実感しました。そのことが大きく影響し、私自身現在の教職に就く前に、コンピュータの開発現場で仕事をする機会に結びつけることができました。

もう一つ、大学時代に忘れられない点字との思い出があります。現在東京大学で教授をしておられる福島智先生が大学院で勉強されていた頃、福島先生が必要としていた参考文献を点訳するアルバイトをしました。都立大学の図書館にしょっちゅう通い、晴眼の学生の方に本を読み上げていただき、パーキンスブレーラーで毎日8時間点訳をしました。墨字の本を1冊点訳するとしても1週間ぐらいかかりますので、とても忍耐と体力のいるアルバイトでした。しかし、点字を通じて、盲聾の方も最先端の学習ができることを知り、そのお手伝いができることに喜びを感じたものです。

6. 公共施設の点字表示

私が社会人になった1990年代頃から、公共施設や交通機関にも触地図や料金表、フロア案内など、点字を用いた表示が増えてきました。これらは大変ありがたいことです。その頃より前は、駅の階段を上り、ホームに着いてから放送でそのホームに来る電車は目的地とは違う場所に行くことを知ってがっかりしたものです。しかし、今では、階段を利用する直前に手すりに書かれている点字表示を読むことで、向かう先のホームが何番線か、電車の行き先はどこかがわかります。また、この点字表示は、文字を読む際に手すりに沿って無理なく指を動かせるように付けてあります。弱視や晴眼者の友人よりも早く情報を手に入れて伝えてあげることもできるほどです。

一方で、せっかく点字の表示があるのに、触りにくいものもあります。例えば、触地図などで、台の上の面に置いてあるのであればよいのですが、台に垂直に設置されている場合、そのままで点字や触図を読もうとすると大変読みにくい手の角度になってしまい、読むのに疲れてしまうことがあります。台に対して垂直ではなく、水平か

あるいは水平とまではいかなくても少し斜めにしてほしいものです。

国会の参議院のロビーには議場模型があります。2010年頃に私がこの模型の制作の監修をしたときには、点字を読みやすくするために斬新なアイデアを出しました。それは、目で見ると点字の向きが上下逆になっているのですが、指では読みやすい向きに点字プレートを貼ることです。参議院の広報担当の方が当事者視点を大切に考えてくださる方で、何度も模型会社に粘り強く私の意見を伝えてくださり、とても良いものができました。参議院の見学は、視覚障害のある人も十分に楽しむことができ、わかりやすい点字パンフレットもあります。機会があればぜひ見学していただき、議場模型も触っていただけると場内のイメージが湧くと思います。

7. 点字サインの国際標準化

私は2010年頃 I S O（国際標準化機構）の点字サインに関する国際標準化のための専門家会議に日本の専門家として参加させていただいたことがあります。公共施設や家電製品などのさまざまな場所や物に適切な点字サインを表示するために、日本が J I S（日本工業規格）などで進めてきた標準化への取り組みを国際的に提案し、インシアティブを取りながらまとめていくというのが私に与えられたタスクでした。国内での関係者会議を通じて日本の状況を理解し、イギリスやドイツなどの代表と細部にわたって議論をしながら合意のできた内容を文書化しました。その文書は、最終的に I S Oでの各国の投票の結果採択されました。

会議の中では、点字の大きさ、高さ、1行の長さ、表示位置、表示部の素材、触読のための安全性、保守の必要性、案内板・手すり・ボタン・ダイヤルなどでの表示方法などについて、言葉の定義をしたり、技術的な限界を考慮したうえでの現実的な基準を検討したりしました。また、関係文書との重複を避け、各国の国内ルールの妥協の範囲を探りつつ、当事者の視点を組み込みながら、議論の着地点を探しました。

学生時代は国際組織で活躍したいと思っていた私にとっては、大変ありがたい機会をいただけたことに感謝しています。そして、点字というたった六つの点で成り立つ、極めて少数の人間しか価値を感じていない文字を通じて、国際的な議論ができ、視覚障害のある人々の社会参加につながる仕事の一部を担えたことは、喜びでもありました。

8. 点訳者の高齢化

私はこれまで学習や仕事、趣味などさまざまな場面で多くの点訳ボランティアの皆様に大変お世話になりました。小学校の頃は地元のボランティアの方に読みたい本や問題集を点訳していただきとても助かりました。当時はパソコンが普及していない時代ですから、たった一人の読み手のために時間をかけて点訳してくださっていたことに今でも敬服と感謝の念を忘れることはありません。1990年前後の大学生の頃には、主に主婦をされていたボランティアの皆様と一緒に、当時普及し始めたスキャナ・OCR（文字認識ソフト）・自動点訳ソフトを用いた一連の点訳作業の近代化に取り組んだことを昨日のこのように思い出します。この30年ほどの間に、スキャナやOCRの使い方、UEB（統一英語点字）などの新しい点字表記、点図作成ソフトなどを用いた触りやすい点図の描き方などを日々マスターしてくださり、多様化する点字使用者の果てしないリクエストに何の見返りも求めず対応してくださってきたボランティアの皆様の寛大な心と点訳してくださった点字に触れるたびに、自分自身も何らかの形で社会のために役立つことをしていきたいと感じます。また、点訳者と利用者という関係だけではなく、視覚障害のある人が理解をする手段やプロセスなどの特性も把握してくださり、かゆいところに手が届く点訳をしてくださっていることも本当にうれしく感じます。

そのようなボランティアや専門点訳者の方々の高齢化は大きな社会問題ではないかと思います。特に本来は政府が適切に支援をすることが求められる大学などの高等教育や初等・中等教育におけるインクルーシブな教育現場では、点訳ボランティアの役割は不可欠な状況であるにも関わらず、今後の人員の確保や専門性の担保については、有効な方策が提示されていないのが実態です。デジタル化やユニバーサル・デザイン化により、解決される課題もある一方で、当事者のニーズにきめ細やかに対応できる即時性と専門性の質を維持していくことも必要ではないかと考えています。

9. 地図・教科書・試験の触図化や点字化

近年私は点字地図帳の開発、小学校・中学校の点字教科書の編集・各種の試験問題の点訳などに関わっています。それらに共通して言えることは、膨大な情報のなかから、点字使用者が目的の情報をすぐに検索できる仕組みを考える必要性があることです。

例えば、地図では海を示すために凸点ではなく凹点を用います。そうすることで、海の部分が陸地部分を触る際のノイズにならず、目的の場所を探しやすくなります。また、川や海岸線、山脈などについて、それぞれ触った瞬間に手触りですぐに違いがわかるように、点の大小ではなく、点線の点間隔を工夫したり、特徴的な形のシンボルを用いたりしています。これらを用いることで地図の読み取りがずいぶん速くなります。

また、特別支援学校中学部の社会科の点字教科書では、各単元の最初に、その単元の構成がわかるように單元ごとの目次を付けています。墨字では見開き2ページの1單元でも、点字では30ページにもなります。そして、その1單元には文章が三つぐらい、写真や図・グラフ・地図が10ぐらい、ワークやまとめなども入ってきます。単元の最初にそれらが掲載されているページと行が示されていることで、生徒たちがスムーズに読みたい資料を探すことができます。

近年試験問題の点字化の際、2行以上の選択肢がある問題では、従来の方式とは異なり選択肢の記号部分だけを左に飛び出すように書き、選択肢の内容は記号が書かれた位置より右側に書くようにしています。そうすることで、次の選択肢を探したり、何度も読み返したりするときにすぐに選択肢を見つけることができます。長文問題で空欄や下線部を探す場合には、長文の左の欄外に上から下まで縦線を一本引いておき、空欄や下線がある行では、左にある縦線上に空欄や下線に付されているのと同じ記号を書き出しておきます。そうすることで、欄外の縦線を上下にたどるだけで該当の空欄や下線のある位置をすばやく探し出すことができます。

これらの例はごく一部にしかすぎませんが、点訳するうえでの工夫や適切な使い方を生徒たちに説明し、フィードバックをもらうことでより洗練したものにつなげていけるよう努力しています。

これまで点字による大学入試等の試験では、晴眼者の1.5倍の時間延長が認められてきました。しかし、この1.5倍という基準は40年以上前に研究された結果に基づいています。その頃に比べ、最近の試験問題では、文章量が何割も増え、図表の数も多くなり、複数の資料を比較しながらその内容を読み取り、解答に結びつけるものが増えています。このような試験問題を点字使用者が不利なく受験できるように点訳するには、教科の内容に精通した知識と点字の知識の両方が必要です。また、1.5倍の時

間延長を見直すことと、点字を用いた学習手段に合った試験問題作成上の基準を作る
ことが求められます。このことについては微力ではありますが研究を続けていきたい
と思っています。経験だけではなく、根拠に裏付けられた配慮により、点字で学習し
てきた後輩が社会のなかで能力を正当に評価されるように協力していきたいと考えて
います。

現代は情報量がとても多い時代で、点字の場合も大量の情報の中からいかに速く必
要なものを探せるかが重要です。その意味で、検索性の高い点字資料を作っていくこ
とが必要であると感じています。伝統的な点字は左から右にひたすら読むことだけを
想定していますが、現代の点字は縦に触って必要な場所を探したり、グラフや表、地
図など、ビジュアルな資料を横にも縦にも触りながら短時間で理解したり、片面では
収まらない図表などを見開きにしてページを何度もめくらずに触れるようにしたりす
るなど、さまざまな工夫が求められています。そしてそのような配慮は自動点訳では
今のところ十分ではありません。視覚障害者の手で読む文化に精通した専門の点訳者
の存在が欠かせないと断言できると思います。

10. おわりに

ここまで40数年を振り返り私と点字との関わりについて述べてきました。その上で
改めて私自身、点字や点字に関わる多くの人々に支えられ、点字を使うことで学び、
思考し、表現し、生活を豊かにしてることができたのだと実感しています。また、
点字投票、公共料金の点字による通知、家電製品の点字表示、街中の様々な点字サイ
ンなど、社会生活に不可欠な点字の存在を再認識し、それらを可能にしてきた先人の
努力の成果に敬意を表したいと思います。そして、社会の中では少数者でありながら
も点字の価値を日々訴え、点字による試験で視覚障害者が正当に評価され、学習や職
業へのアクセスが可能になるように、さらなる研究や提案をしていかなければならな
いのだと気持ちを新たにすることができました。今後も点字に関わる国内外の皆様と
協力しながら、点字の価値を高め、視覚障害当事者としての立場を維持しながら、共
生社会の中で視覚障害の有無を超えて役立つような関わりをしていきたいと考えてい
ます。

日本点字に関する略年表

2020年は日本点字制定130年にあたる。点字が日本に紹介されて以降今日まで、どのような歩みをたどってきたのか、年表の形にまとめた。本号の関連記事などを読まれるときに参考にしていただきたい。

1865（慶応元）年、幕府から派遣された外国奉行・日向守剛中^{ひゅうがのかみたけなか}に随行した岡田攝藏^{せつぞう}は、パリ盲学校を訪問。そのときの日記に、学習の基礎になっている文字として、ブライユ点字について記述している。点字が日本に初めて紹介された。

1879（明治12）年2月、在米留学生監督・目賀田種太郎^{めがたねたろう}は、パーキンス盲学院を視察。その報告文に、視覚障害者の文字としてブライユ点字が有用であることを力説した。

1887（明20）年10月、官立訓盲啞院教諭兼掛専務^{かかりせんむ}の小西信八^{のぶはち}は、凸字を使った漢字仮名交じり文による教育が困難であることを、かねてより痛感していた。小西は、海外の資料を求めて、東京教育博物館を訪問、館長の手島精一よりブライユ点字を紹介される。小西は生徒の小林新吉^{しんきち}に、点字によるローマ字綴り方を教えると、1週間で読み書きができるようになった。この結果から小西は、ブライユ点字が優れていることを確信し、日本の仮名文字を表現する点字の必要性を痛感した。

同 12月、小西は同僚の石川倉次に、ブライユ点字を日本語を表す点字に翻案するよう依頼。

1888（明21）年6月、石川は8点点字の最初の案を発表。これに対して小西は、世界共通となっている6点点字で研究を進めるよう再考を促す。この年、小西の勧めで、他の教員、生徒らも、日本語点字の研究に着手した。

1890（明23）年7月20日、石川は最初の6点点字配列表を発表。

同 9月27日、教員遠山邦太郎の案、教員石川倉次の案、生徒伊藤文吉・室井孫四郎^{ぶんきち}共同案の3案に選ばれたので、第1回点字撰定会が開かれた。

同 11月1日、第4回点字撰定会が開かれ、石川倉次案を採択した。以後、この日は点字制定記念日となっている。

同 12月27日、東京盲啞学校は、石川案の点字を「日本訓盲字」として印刷し、普

及の目的で京都市立盲啞院等の盲学校へ配布した。

1891（明24）年4月、京都市立盲啞院が、石川倉次翻案の「日本訓盲字」を採用した。この採用は、点字が全国に普及する原動力となった。

1898（明31）年2月15日、石川倉次は「拗音点字」を発表。翌1899（明32）年7月6日、東京盲啞学校が、石川の「拗音点字」を採用。当時は、一般的に歴史的仮名遣いを使用していたので、拗音点字に反対する人たちもいた。

1901（明34）年4月22日付の官報第5337号に、石川案が「日本訓盲点字」として公示。名実ともに「日本の点字」となった。

1911（明44）年5月、文部省が「日本訓盲点字説明」（石川倉次執筆）を刊行。点字の普及・啓蒙に貢献した。

1922（大正11）年5月11日、大阪毎日新聞社（現・毎日新聞社）が「点字大阪毎日」（1943年1月「点字毎日」と改称）を創刊。週刊、800部。初代編集長・中村京太郎。

1925（大14）年4月、衆議院議員選挙法改正により、点字投票が認められる。

1928（昭和3）年2月20日、普通選挙制による初の衆議院選挙で、初めて点字投票を実施。点字投票数：5428票。

同 3月、文部省に盲学校教科書編纂委員会が発足し、仮名遣いや分かち書きについて研究を行った。「点字書き方に関する法則」として発表。

1929（昭4）年4月、文部省が初の盲学校用点字教科書『盲学校初等部用国語読本』の編纂を開始、点字大阪毎日より出版された。

1936（昭11）年4月、岩橋武夫創立の日本ライトハウスが、世界で13番目のライトハウスとして公認される。

1937（昭12）年11月1日、沢田慶治^{けいじ}が体系化した外来音表記法が東京盲学校で正式に認められる。

1940（昭15）年11月10日、本間一夫が日本盲人図書館（現・日本点字図書館）を設立。

同 11月、社会教育家・後藤静香^{ごとうせいこう}の指導により、点訳運動が始まる。

1955（昭30）年10月、日本点字研究会（日点研）が発足。盲学校教員が主なメンバーであった。『点字文法』（1959）、『点字文法（点字国語表記法）』（1966）等の資料を発行した。

1966（昭41）年7月、日点研が発展的に解消され、日本点字委員会（日点委）が発足

した。盲学校の全国組織である全日本盲教育研究会と点字図書館や点字出版所が加盟する全国組織である日本盲人社会福祉施設協議会（日盲社協）からそれぞれ代表委員を選出し、学識経験委員を加えて組織された。『日本点字表記法（現代語篇）』（1971）、『改訂日本点字表記法』（1980）、『日本点字表記法 1990年版』（1990）、『日本点字表記法 2001年版』（2001）、『日本点字表記法 2018年版』（2018）等の資料を発行した。

1981（昭56）年3月、日盲社協点字図書館部会が、『点訳のてびき 入門編』、『点訳のてびき 解説編』を刊行。2019年2月、『点訳のてびき第4版』を刊行（発行は、全国視覚障害者情報提供施設協会）。

1986（昭61）年7月1日、内閣告示として「現代仮名遣い」が公布された。1946年の「現代かなづかい」を改定したもので、その内容はごく一部の変更があっただけであった。その前文に「この仮名遣いは、点字，ローマ字などを用いて国語を書き表す場合のきまりとは必ずしも対応するものではない」と記載された。点字では、従来の仮名遣いを続けることとした。

1990（平成2）年11月1日、日本点字制定100周年。日点委が記念として『日本点字表記法 1990年版』を発行。郵政省より記念切手が発行された。

2001（平13）年1月28日、点字関係職種の専門性と社会的認知度を高めることを目的として、日盲社協により、第1回点字技能検定試験が実施された。

以上

「日本の点字制定130周年記念講演会」開催

2020年11月1日、すみだ産業会館（東京都）9階において、「点字の昨日を知り、点字の明日を想う」のサブタイトルで、標記講演会を開催した。

今回は、新型コロナウイルス感染予防のために、来場者の事前登録及び密集を避ける座席配置、検温と記録、マスク着用、司会者がフェースガード使用、演題にアクリル・パーテーションの設置及び消毒等の対策を講じて実施した。

参加者は、来場72名に加えて、YouTubeの生配信視聴者最大370名であった。引き続き、URL：https://youtu.be/4jj0I0_dwCUで視聴できるので、ご覧いただきたい。

1890年11月1日、東京盲啞学校において開催された第4回点字撰定会において、石川倉次の案が採用され、日本の点字が制定されてから本年度130周年を迎えた。この記念すべき年にあたり、関係団体が協力して、点字の意義と役割を互いに確認するとともに、今後の日本における点字のあり方等を考える、大変良い機会となった。

主催は、社会福祉法人日本盲人福祉委員会・社会福祉法人日本視覚障害者団体連合・特定非営利活動法人日本点字普及協会及び日本点字委員会で、後援は、文部科学省・厚生労働省・毎日新聞社点字毎日、協力は全国盲学校長会・社会福祉法人日本盲人社会福祉施設協議会・特定非営利活動法人全国視覚障害者情報提供施設協会・特定非営利活動法人日本点字技能師協会であった。

日本点字委員会の平松智子委員（和歌山県立和歌山盲学校）が司会を務め、10時30分に開会の辞を、日本点字委員会の渡辺昭一会長が、主催者挨拶を、日本視覚障害者団体連合の竹下義樹^{よしき}会長（日本盲人福祉委員会理事長）が述べた後、講演に移った。

一つ目の講演は、「点字は私の父、指点字は私の母」。講師は、福島智氏（東京大学先端科学技術研究センター教授）であった。

二つ目の講演は、「＜暁天の星＞から＜満天の星＞へ 一点字をめぐる不易・流行」。講師は、岸博実氏（日本盲教育史研究会事務局長）であった。

最後に、日本点字普及協会の藤野克己^{かつよし}理事長が閉会の辞を述べて、12時30分に閉会した。

以下に、両講師の講演の概要を記す。なお、福島氏の講演については、大分県で盲

ろう者の通訳・介助をされている金子真佐美様が講演録音を文字起こししてくださったものを元になっている。この紙面をお借りして感謝の意を表したい。

点字は私の父、指点字は私の母

福島 智

竹下日視連会長の理路整然としたお話のあと、非常に話しにくいんですけども、話がそれるかもしれませんが、私にとっての点字、そして指点字についてお話ししたいと思います。

いきなりですが、中東のわりと中心的な空港でドバイ空港っていうのがあるんです。アラブ首長国連邦の中。トランジット、乗り換えの関係で降りたことがあるんですが、トイレに行きたくなくて、多目的トイレみたいな大きなトイレがあったから、そこにいったんですよ。

わりとあっちこっちのトイレには行ってるから、入り口まで送ってもらえたら、あとは一人でやれます。介助者は女性が多いですし。

用を足して次は水を流す番なんですが、どこにあるのかなあと探して行って、背中のほうの壁を探ったらボタンらしきものがあったから、これが流すボタンなんだろうなあ、と思いました。気を付けないと緊急のボタンを押すことがありますので、本当にこれは流すボタンなんだろうかと周辺を探っていたら、そこに、なんと点字があったんですね。

おー！すごいな、国際空港だから英語なんだろうなあ、と思ったけれど、英語としては読めないからアラビア語かな、それはお手上げだなあと思って、もう1度ふと触ったら、それ「ナガス」という日本語だったんですよ（会場、笑い）。

日本語をなんで最初読めなかったのか分かりませんが、あとで通訳者に確認してもらったら、そのトイレが我々がT O T Oのトイレだったから（会場、笑い）、点字も日本語で「ナガス」と書いてあった。なんか、世界にまで日本の点字が広がったということは誇らしい感じがしました。その一方で、これ読めるの日本の盲人だけだよなあ、とちょっと複雑な気持ちがしました。

今はあちこちで点字を見かけるようになりましたけれども、やはり、その背景、歴史というものは本当に大変な、多くの人たちの努力が積み重なってきたんだと思います。

私が点字と出会ったのは九つのときで、それまでは、見えて聞こえる普通の子供でした。9歳、眼科の入院病棟にいて、ほぼ失明した状態になって、そこでたまたま点字を勉強している青年がいて、その人が一緒に勉強しようといろいろ教えてくれたんですね。

小さいとき、九つのときというのは頭が軟らかいですから、点字の組み合わせはわりとすぐに覚えられました。カルピスの蓋とかジュースの蓋を六つ並べて、組み合わせを覚えるというやり方で、20分ぐらいで覚えたんです。なんだ、簡単だなあとそのとき思ったんですが、そのあとが大変でした。ご承知のとおり、点字は触って読む、触読が難しい。慣れてしまった点字使用者にはなんでもないですが、最初チャレンジするときはすごく難しい。「ヤマ」とか「カワ」「イヌ」とか「ネコ」、そういう簡単な言葉でも読むのが難しい。自分で点字を打つことは出来るんですが、読めないという状態で退院して、家に戻ってからずっと読めない、読みにくいという状態が続いていました。

ですが、多くの視覚障害者が経験するように、何カ月かやって、あるとき気が付いたら読めるようになる不思議な瞬間というのを私も経験して、ゆっくりではあるけれどどうにか読めるようになって、そのうえで盲学校に転入しました。

盲学校へは、家からドア・トゥ・ドアで4、50分かかって電車を使って通学するようになるんですが、すごく嬉しかったんです。普通の学校に1年、2年、3年と通っていたけれども、いろいろ眼の関係でロクに行けなくて、ドクターストップで、1年の内3カ月とか、多くて6カ月ぐらいしか行けなかった。盲学校に転校して、毎日学校に行けるということ。数は少ないけれど友だちがいる。そして先生がたくさんいて、どんな質問も、無視されないで相手をしてくれるというのは、嬉しかったですよね。音楽室も自由に使えましたし。

そうした生活の中で、いちばん好きな場所は図書室でした。点字の本が置いてあるので、古本屋みたいな匂いがしてましたね（笑い）。なんでそういう匂いになるのかわかりませんが、懐かしいような匂いで。図書室に入って、ザーっと撫でて書架を触って行って、どの本がいいかなあと見ていく。これがいいか、あれがいいかって探し

ているのが、とても知的な時間でした。目が見えなくなって点字になると、絵が見えない、漫画が読めないっていうのは、すごく苦しいところでしたけれど、文字を読むことによっていろんな場面を心に描いていく、それも楽しいなあ、とだんだん思えるようになりました。

中学生ぐらいになって録音図書も聞くようになったんですけども、竹下会長もおっしゃっていましたが、耳で聞くのと指で読むのは少し違うかなあ、と私も思っていました。録音で聞いていたのは、その当時人気だった森村誠一や横溝正史とかの推理ものが多くて、さっと聞けるようなもの。点字で読んだのは、いま覚えてるのは、ヘミングウェイの『武器よさらば』とかですね。録音図書で読めばラクだし、速く聞けるはずなんですけど、なぜか当時の私は、点字で読もうと思ったんでしょうね。ゆっくりになってしまうけれど、しっかり深く読みたい、そういうときには点字のほうが向いているかもしれません。

高校生になって、筑波大学附属盲学校に転校というのか、転入しました。1年、2年と過ごすんですが、そのとき既に片方の耳が聞こえなくて、高校に入ったときに、体育とかで手を叩いて「ここに集合！」と言われても、私はそこに行けなかったんですよ。方向が分からなくて、上級生などに、私は兵庫県出身ですけども、「関西の盲学校には体育はないのか」みたいなこと言われて、少しいじめられていたこともあったんです。だんだん、どうも福島は聞こえないらしいことが周りに伝わって、みんなが逆に援助してくれるようになりました。聞こえやすいように、聞こえている左の耳の側から話すとか、手を叩かれてそっちに向かって走るというのも、自分では方向が分からないから、「お前は何も考えるな、俺達がセットしてやる」と言って、私の体を左や右に調整してミサイルみたいに走ったりしていたんですよ。

片方の耳だけれど友だちにも恵まれて、なんとかやっていけるかなあと思っていたら、今度は残された耳が急に聞こえなくなっていくんですね。高校2年生の11月から12月にかけての時期、1980年の暮れなので、今から40年ぐらい前の話です。12月の終わりに私は18歳になって、どんどん耳が聞こえなくなってきた、これはエライことになったなあ、本当にどうしたもんかと途方に暮れていました。

81年、ほぼ3カ月ぐらいの間に急にガーッと落ちて、ほとんど聞こえなくなるんですね。最初は、大きな声で耳の横で話してもらえたらなんとか聞こえたんですが、だ

んだんそれも難しくなっていました。

そのときは実家のある兵庫県の神戸に戻っていて、両親と兄と過ごしてたんです。母だけがかろうじて点字ができたので、点字の筆談のようなことをしてもらっていました。でも、筆談と言ったって、「ご飯が出来たよ」みたいなことを携帯用点字盤とかで母親が書いて、それを私が読んで、「あー、ご飯が出来たんか」というふうに声で言って、それで終わりみたいな、すごい短い、会話とは言えないメッセージですよ。点字盤は時間がかかる。

ライトブレーラーというのが当時あって、パーキンスよりは安いから使ってる人もいたんですよ。それでちょっと書いてみた、筆談というか、タイプライター談というのをやってたんです。手元にライトブレーラーないか探していたんですが、すごい古いのしかなくて、どうも動かないんですけれども、ご存知ない方のために、一応お持ちしました。（皆に見せながら）こうやって六つのキーがあるんです、1、2、3、4、5、6と。本当は、打つと左に動くんですが動かない、なぜか（会場も福島も笑う）。イメージだけで。

ライトブレーラーは家で落ち着いて使うときは少し速いからいいんだけど、病院の待合室では出来ない訳ですよ。うるさいし、歩きながらも出来ない。私もおふくろも不便だなあと思っていた訳です。何かないのかなあ、と。

そこで指点字の考案ということが起きるんですが、それは、ライトブレーラーを使っていた、ということが一つのステップになっていて、（通訳者に向かって）例えばこのライトブレーラーに「オハヨー」と打てますか？　じゃあ、僕の指に打ってみて。はい、打てましたね。このライトブレーラーの六つのキーをそのまま私の指にイメージして打ったということです。最初に打った言葉は「サ ト シ ワ カ ル カ」という言葉です。

そのとき私はすぐに読めたんですが、なぜ読めたかというと、たぶん点字使用者だったということ、18歳で頭が柔らかかったということ、そして、おふくろがもともと速く打てないから、ゆっくり打ったということです。向かい合わせで打ったんですけれども、読めました。

読めたんですが、そのあとの受け止め方が大分違って、おふくろは「すごいもの！　天にも昇る心地がする」とか言ってるんですが、「そんなものするかっ！」と

いうふうに僕は思っていましたね。

まず、ヘンなことしよるなあと思った。指で指にタッチするなんて、これまで誰もしなかったことをする。そして相手がおふくろ。可愛い女の子だったら嬉しかったかもしれませんが、おふくろと手でベチャベチャやったって仕方がないよなあ、という感じだったんです。生意気な高校生ですから、「いずれ俺がもっといい方法を考えついてやるぞ」と思ってたんです。それから40年経って、結局これを超える方法は見つかっていない。私には指点字が向いてるんだろうなあと思っています。

私が指点字の真価、本当の長所、価値を見出したのは、盲学校に戻ってきて、友だちと再会したときです。ほとんどの生徒が点字を知っている。弱視の生徒でもゆっくりなら打てる人が多い。教員も寮母さんも点字を知ってる人がほとんどなので。みんなと話が出来る、指点字で話が出来るってことが、これはすごい方法だな、これならやっていけるんじゃないかと思ったんですね。

これが1981年の4月ごろのことなのですが、私は高校3年生として全盲ろうの状態です。これがですね、なぜだか分からないんですが、だんだんと憂鬱になっていくんですね。帰ってきたとき、当初は、あいさつをしたり励ましをしたりでみんな指点字で話してくれるんですが、その後、だんだんとあいさつとかも減っていく。誰か一人の人が話しかけていても、それは相手の人が話したいことがあって私に話しかけている。そして10分ぐらいしたら、じゃあね、と離れていってしまう。私は非常に孤独な思いを抱えて残る訳です。でも、いったいなぜ孤独なのか、みんなから孤立しているのかっていうことが分からなくて。原因が分からないから、どうすればいいかも分からない。そういう状況が2カ月、3カ月、4カ月近く続くんです。

そこで、新しい段階に指点字を生まれ変わらせる取り組みをしてくれた人がいます。指点字での通訳というものを考案してくださった人がいて、今日はこのフロアにいらっしやいます。ちょっと出てきていただけますか。

甲賀^{けいこ}佳子さんで、当時は三浦さんとおっしゃってました。まず最初に一言伺いたいんですが、先ほど私が話していた孤独だったそういう時期に、何度か会っていると思いますので、甲賀さんは私の盲学校の先輩なんですけれども、どんな印象でしたか？

甲賀：「福島さんをご紹介いただいたのは、亡くなられた^{しおのやおさむ}塩谷 治 先生です。私は、先生の盲学校での最初に担任をしていただいた生徒として、長くお世話になりました。

その関係で、「今度福島のカラスを担当することになったけれど、何をどう進めたらいいか、一緒に活動してくれないか」というようなことを言われました。福島さんには、4月、盲学校の寄宿舎で初めてお会いしました。

今の質問にお答えするなら、当時、指点字は、活発に出来る人たちに囲まれて、活発に使われていたと思います。しかし、1対1の会話、もしくは学校の授業、先生が話すことをクラスメイトが伝える、そういった形だけで、会話の中に福島さんが入ることは出来ていなかったと思います。

私は和光大学に行って、たまたまたくさんの聞こえない学生と一緒に過ごしていたので、手話通訳者や周りの友人たちが、どういうふうに聞こえない人と話をしているか体験していたので、たまたまそのことを応用しただけだと思います」

ありがとうございます。では、その革新的な取り組み、指点字の通訳が始まった、あるいは始めていただいたということを、ちょっと皆さんがイメージ出来るようにしたいなあと思うんですけど。

指点字通訳の眼目は、通訳者がしゃべりながらも、同時に指点字を打つ。そして、ほかの人同士話してるときも盲ろう者に伝えるということなので。甲賀さん、どなたかに話しかけていただいて。

甲賀：「(福島に指点字を打ちながら話す) はい、では、本当はそのときは、同級生の人に今のように指点字を打ちながら話しかけたんですけど、今はその人がいないので。

突然ですが、岸先生」

岸：「はい (甲賀は指点字通訳を続ける)」

甲賀：「今日は京都から朝早くおいででしたか？」

岸：「実は昨日来まして、夕方まで孫と遊んでいました」

甲賀：「ええ、お孫さんが東京にいるんですか？」

岸：「はい、武蔵小金井 (東京都小金井市) にいます」

福島：「岸先生はすごく、その一つ、盲人関係の文化や点字も含めて歴史を研究なさっていますけれど、どうしてそういうことをなさろうと思われましたか？」

岸：「たまたま日本で最初に出来た京都盲聾院をルーツにした学校で働いて、校内に資料室があったから、という感じです」

福島：「でも、京都盲の同僚の方はたくさんいる訳で、その中でなぜ岸先生が、というのが（会場、笑い）」

岸：「まあ、なんとなく空白は埋めたいなあという気持ちがあった」

福島：「なるほど、なるほど、はい！ありがとうございます。このあとの話もありますからね、ありがとうございます」

皆さん、今私は一人で話していたのではなく、甲賀さんという方を通して岸先生とお話出来た。一人でここで講演しているだけでは、ほかの人と話は出来ない。けれども、そうしたことが実現したというのが通訳のすごいところなんですよ。

じゃあ甲賀さんに最後に伺いますけれども、私が通訳を受けるようになって、私の印象は変わりましたか？

甲賀：「福島さんが冗談やユーモアを言えるようになったと思います。リアルタイムの会話に参加できるようになったので、先ほどのように、皆さんをよく笑わせてくれるようになったと思います」

なるほど、ありがとうございます。そのリアルタイムってのがすごい重要だと私も思いますね。

甲賀さん、ありがとうございました。なんか歴史の生き証人という感じで。こんな場面は2度とないと思います。

皆さん、今ご覧いただいたように、会話というのが単に一方的に言葉を伝えたり、あるいは1対1で話をするのではなくて、すごく広がりのある営みだということが、耳が聞こえている人には分かりにくいんですよ。私もかつて聞こえていたから当たり前のことだと思っていたけれど、聞こえなくなって、自分が穴の底に、あるいは、大きな壺の中に落ちたようなそんな感じがしていました。

そこから指点字、後には様々なコミュニケーション方法での通訳というものが始まって、盲ろう者もこの世界に繋がるようになるんですね。恐縮ですが、私がその第1号として、通訳を受けながら社会参加するという見本になったということで。これを実現した背景には点字があるということ、点字がなければ指点字が生まれませんし、指点字が生まれなければ、私は、今の私はなかったと思っています。点字にはこのように広がりとか応用性があり、様々な、例えば技術的な部分でも、ピンディスプレイによって、盲ろう者もずいぶん情報が得られるようになってますけれども、これも点

字がなかったら出来ない訳で、そう考えていくと、本当にルイ・ブライユ、石川倉次先生、そのほか多くの皆さんによる点字の文化発展というのは、ものすごい大きなことだなあと感じています。

盲ろう者には、生まれつきで例えば手話を使っている人もいますが、手話はピンディスプレイには出来ないのです、メールなどをすることを考えると、とにかく点字をやる必要がある。それで今、盲ろう者のコミュニティでは、もともと盲だった人、もともと健常だった人、もともとろうだった人などが混ざって、ピンディスプレイを使ってメールのやり取りをしたりしています。日本語があまり上手じゃない人もいますけれども、だけど、気持ちが通じることがいちばん大事だなあと感じています。

本当に私は、点字によって生かされたなあというふうに思いますし、私以外の多くの盲人も盲ろう者も、点字は心を豊かにすると同時に命に繋がるものだとも感じています。是非これから大切に、ほかの方法がダメだと言うのではなく、ほかの方法も同時に進めながら、だけど決して点字の文化が廃れることのないように守っていければ嬉しいなと思っています。

＜暁天の星＞から＜満天の星＞へー点字をめぐる不易・流行ー

岸 博実

本稿は、日本の点字制定130周年記念講演のための原稿として用意したものがベースです。実際の講演においては、いくつかの加除をほどこしましたので、YouTubeで視聴なさる場合、以下とは異なる点もあることをご了解ください。

はじめに

今年の夏、日本点字委員会の『日本の点字』第44号に寄せた拙文「ネットオークションと点字や視覚障害者の歴史」で、＜ヤフオク歴史研究家＞と名乗りました。＜Yahoo!オークションやネット上の古書店＞を通して、点字による手紙や書籍、あるいは盲学校の古い絵葉書とか文書とかを入手してきたのは本当です。ですが、＜歴史＞学の研究方法を修行した体験もなく、査読付きの論文一つも書いた経験はありません。

せん。＜歴史研究家＞は誇大表示でした。

日本で最初にできた京都盲啞院をルーツにもつ学校に長く籍を置き、校内の資料室で見たり触ったりした史料を「点字ジャーナル」や「点字毎日」から機会をいただいて、「スゴイのがあります」と、横流ししてきたにすぎません。いずれも拙い連載でしたが、昨年、前者をもとにした『視覚障害教育の源流をたどる 京都盲啞院モノがたり』を、この度は『盲教育史の手ざわりー「人間の尊厳」を求めてー』を刊行させていただきました。

2014年の「点字毎日」で「盲人野球、現グランドソフトボールのルーツ」を探ったとき、冒頭に【福島智氏は、昭和50年頃、兵庫県立盲学校の小学部で、「盲人卓球に使うゴロピン」と「かなづちの柄か何か」を使うミニチュア野球を楽しまれたそうです。「消える魔球」（音が消える）を編み出した友もいたとか。】とご紹介しました。ネットで見つけた兵庫盲同窓会誌所収『幻のホームラン』の一節でした。これが、無断引用。6年もの間、お断りしていないままでした。ごめんなさい。11月の新刊では出典を明示しておきました。どうかお許し下さい。愉快かつ味わい深いエッセイです。皆様にもお奨めします。

お詫びから言い訳に戻ります。点字に関しても、格別の指導法を編み出したわけではありませんし、点字技能師の試験を受けたことすらありません。ですから、本当は、ここに立つ資格などないのです。ただ、京都府立盲学校に着任した日に生まれて初めて点字と出会い、とにもかくにも「点字大好き人間」になったとは申し上げてもよいかもしれません。これまでに、広瀬浩二郎さん編の『万人のための点字力入門 さわる文字から、さわる文化へ』に書いた「盲学校における点字教育の過去・現在・未来」などに、いくつか、思いのかけらを込めました。

10年前、視覚障害者支援総合センターが日本点字制定120年を記念してエッセイを公募なさった折に投稿した作品です。気に入ってくださったお方もあるのですが、やや冗長だと感じ、削いでみました。

つぶらな わたし（抄） きし ひろみ

つぶつぶ、つぶら

点字は、指で読みます。目でも読めます。実は、唇で読む人もいます。

読書にぴったり。名刺を作れます。手紙が書けます。投票もできます。
本になります。CDのラベルにも新聞にも教科書にも、なります。

つぶつぶ、つぶら

点字は、エコ。たった六つの点で限りなく何でも 描けます。

つぶつぶ、つぶら

点字で、勉強、できます。仕事も、できます。
考えながら読むのにぴったり。考えながら書くのにも。
遊びも、大好き。しりとりだって、もちろん。
トランプもカルタも百人一首も、できます。

つぶつぶ、つぶら

点字は、しょうしん しょうめい にんげんの もじ。
なので、笑います。そして、泣きます。
だから、恋します。ときに、怒ります。きっと、夢も見ます。
さびしがっているときもあります。友だちを探しているんです。
つんつんしてるように見えるかも……。ほんととはとっても人が好き。

つぶつぶ、つぶら

点字は、文字の世界の新人です。
フランスのルイ・ブライユがを見つけました。日本の石川倉次が育てました。
目の見えない人にバリアをやぶらせます。
「読みたい!」・「書きたい」・「支えたい」気持ちを、叶えます。

つぶつぶ、つぶら

点字は、ドラえものの絵本にも、切手やコインにもなっています。
点字は、シャンプー・リンスやエレベータの表札です。
奏でます、音楽を。いつか、きっと、宇宙船にも描かれるでしょう。

どの国でも、`a b c`の点字は、同じ。日本語も、韓国語も、中国語も、英語も、ドイツ語も、スペイン語も、ラテン語も、点字と仲よし。

青い地球に、くまなく満ちて
つぶつぶ、つぶつぶ、つぶらな、わたし。
ここから、あなたに。 「こんにちは！」

さて、タイトルのうち、＜暁天の星＞・＜満天の星＞については私なりの考えを述べますが、「不易」と「流行」については、考えれば考えるほど、その画然とした区分けを行う難しさを感じています。そこで「不易と流行が互いに浸潤し合っているー不易に流行がまぎれこみ、流行の中に不易が顕われる」というスタンスでお話しします。その腑分けは、皆様に委ねます。ご批判ください。

1 文字の推移 ー凹から平面へ、そして凸もー

近年、盲学校の幼児児童生徒が減り、短いスパンでの人事異動が蔓延している中、視覚障害教育の専門性をいかに保つかが大きな課題になっています。子どもたちが集団的な学習を経験し、教師も指導理念や技法を継承できる場の一つとして、科学ヘジャンプ！の企画が各地で練り上げられてきました。私は国語科ですが、科学的な文章の読解も領分に属しますので、「文字の歴史にワープする、文字の歴史を疑似体験する」ワークショップを試みた年があります。徳島や滋賀の盲学校で同様の授業をしたこともあります。おおよそ次のような構成です。

- ① 人類初期の文字は、東西を問わず、獣骨文字もヒエログリフも楔形文字も素材に凹んだ線で表現しました。見えない人に配慮した訳ではなかったでしょうが、ある程度は触察も可能と言える文字だったのです。
- ② 紙と墨字用の筆記具・印刷機の出現によって、人類全体は大きな利益を得ましたが、見えない人たちが文字から振り落とされる面もありました。
- ③ それを大きく変えたのが、凸状に形成した文字群です。イギリスのムーンタイプ、バルビエの12点点字、さらにルイ・ブライユによる6点への革新、そして石川倉次らによる日本訓盲点字の誕生へと至ります！

この変遷を実感するひと時を通じて、見えない人たちの文字への悲願、6点点字の圧倒的な優位性を改めて考えてみようというコンセプトです。

京都盲啞院や樂善会訓盲院の開発した様々な凸文字の魅力や限界についても意見を交わします。木刻凹凸文字などは私自作のレプリカもどきを提示しました。エンボス加工のほどこされたカードも参考になります。

古代文字のレプリカを撫で、ムーンタイプや12点点字に触れることを通して、生徒たちは大切な発見をします。「6点点字は、人類史の中で、文字のルーキーだ!」、「6点点字が、実際に役立つ凸形の文字としてエース!」などと。つまりは、点字に向き合う姿勢に新しい上書きが起きるのです。

点字には、文字一般と同じく、記録、伝達、表現などの機能があります。学校では、授業のノートを取り、復習・予習に活かせる、内外の友だちとの文通やメールも可能になる、俳句や短歌や詩や作文を自由に書ける喜びをもたらします。学力・認識の向上、つまりは人間発達を支える点字です。

社会的な観点から加えるなら、自分たちの新聞や機関誌をもってつながり、切実な願いと情報をまとめて行政に要望書を提出していく力にもなってきました。

世界で最初に点字投票を実現した経緯については、後にも少し述べますが、それぞれ、主権の裏付け、もっと根源的な言い方をすれば、「人間の尊厳」を保障するツールとしても、私たちの点字は光を放ってきたのではないのでしょうか。

2 ブライユ点字の将来 –アーミテージと日本をめぐる新資料–

この見出しにいう「将来」は、「未来」でなく、「外国からやってくる」の意味あいです。日本の点字研究にきっかけを与えたイギリスの中途失明者アーミテージと東京の手島精一^{ともたけ}をめぐる物語です。ご披露するのは、木下知威氏が昨年、津山洋学資料館刊の『洋学研究誌 一滴 第26号』に発表なさった論考です。タイトルは「点字以前 18–19世紀の日本における盲人の身体と文字表記技術の交差」、未知の資料を駆使し100ページを超える論旨の全ては写しきれません。ぜひ直接あたってみてください。主題は「欧米で発達し、発展していった点字と凸字というメディアが日本と接触し、日本文化・社会また日本の盲人たちとどう融合していったのか。それを近世末期と明治初期に限定し、洋学とその周辺の視点から検討する」と示されています。

以下は、アーミテージから日本へ6点点字に関する情報や資料が提供されたのは西暦何年のことだったかに話を絞ります。従来は、＜手島精一がアーミテージと接触したのは1884（明治17）年のロンドン衛生博覧会に派遣された折であり、その時持ち帰ったアーミテージの『盲人の教育と職業』や点字器が後年小西信八に貸し出された＞とするストーリー描写が広く行われてきました。

これに対し、木下氏は「1879年にアーミテージが行った講演」に着目し、「アーミテージの証言に信をおくなら、この講演の数ヶ月前の1878年後半には日本政府よりB F B Aに書籍、地図、その他の教育用具のセットについて照会があった」と指摘し、「B F B A自体がブライユ点字を普及することを目的にした団体であった」と解説しています。さらに、「日本政府がB F B Aから1878年に入手した」ことが明らかなブライユ点字の見本が教育博物館に在ったとも補っています。静かな調子の論ですが、これは刺激的な投げかけです。

木下氏は、京都盲啞院をテーマに博士論文を執筆した研究者であり、私は、その実証を重んずる研究姿勢からたくさん学ばせていただきました。日本への6点点字の将来をめぐる認識は、永らく「通説」に依りかかってきましたが、それに充足することなく、探求し続ける必要を鮮やかに示唆されたと受けとめています。点字ユーザーと点字関係者一同に問われている課題とも言えるでしょう。

ブライユ点字の実物や点字器、書物については、1881（明治14）年の『教育博物館報』に「点字」という語を用いて掲載されていました。それどころか、もっと前から館内に陳列されていました。しかし、小西信八が手島からそれを借り受けるのは1887（明治20）年です。なぜ数年もの空白が横たわったのでしょうか。小西は、「ブレイユ氏の方式」を紹介した目賀田種太郎の報告書を「心に深く留めないで読み過ごし」と吐露しました。京都の古河太四郎の考案した盲人用文字やサイコロ算盤には、彼が6点点字を知っていた節さえ感じられますが、日本点字の案出には向かいませんでした。このあたりの事情や理由も明らかにしていきたいものです。この一件も含み、この度の拙書『盲教育史の手ざわり-「人間の尊厳」を求めて-』は、点毎連載の100回分に加筆を行ったものですが、一面「ここまでしか分かりません」の連発です。言い換えれば、「面白いテーマの見本市」です。皆様の関心を刺激するものがあればぜひ突きとめて下さい。

3 日本点字の誕生 ―当事者の参画―

中途失明者だったアーミテージは、イギリスにおける盲人用文字を選ぶ過程で「盲人に対する最善なるものの唯一の審判者は盲人でなければならない」という基準を立てたそうです。それは、ひとりよがりや晴眼者を排斥する意図からのものではなく、当事者性の意義を言い当てた名言です。障害者施策を「私たち抜きに決めないで」という主張のやや古風な格調を伴った宣言とも評せそうです。

英国由来のわずかな資材を基に、東京盲啞学校の点字研究が展開されました。その局面局面に立ち入ることはせず、もっとも肝心だったと思える一つの特徴をピックアップし、一緒に考えたいと思うのです。

それは、この研究が石川倉次一人によってでなく、盲人教師・奥村三策^{さんさく}、同僚・遠山邦太郎、盲目の生徒・伊藤文吉、室井孫四郎らとともに推進された点にこそかけがえのない重みがあったということです。まず、小西信八がアルファベットの点字を打って盲生・小林新吉に読ませました。小林少年の習熟ぶりに、小西の直感が確信に高まります。点字の道に誘われた倉次たちには、アルファベットや数字だけでなく、文字種が遥かに多い日本語を「たった六つの点でどう表すか」という難題が立ちふさがりました。点の数を増やそうか？迷い道に入ったほどです。1890（明治23）年になって四回の点字撰定会議が開かれますが、教員・生徒から合わせて四つの案が提出され、ひとつずつ丁寧に吟味されていきます。理屈の応酬だけでなく、実際に指頭で試し・書いてみる丁寧な審査の結果、倉次の案がもっとも優れていると全員の意見が一致しました。この経過と結果に対する不満の声は全く伺えません。何のこだわりも残さなかったのです。

翌年、京都市立盲啞院がこれを導入するわけですが、担当した中村望齋^{もちまさ}も院長の鳥居嘉三郎^{かさぶろう}も、すなおに東京生まれの日本点字に従います。鈴木力二氏は、その経緯を指して「アメリカのような点字抗争を起さなかった」と讃えています。当時の京盲に、妙に張り合う意識がなかったとも考えられます。が、私はそれ以上に「倉次たちの点字研究と選定に、当事者、しかも生徒も教員と対等の立場で参画したことによって、文句をつけようのない完成度を実現した」事実由来だと考えます。形式的な「参加」ではなく、深みのある「参画」だったのです。

ちなみに、中村望齋が点字研究を始めようとした1891年のある日、それを院長に相

談したところ、ただちに机の引き出しから英国製の点字器が取り出されたと、中村が語り残しています。ルイ・ブライユ生誕100年を祝う席での回顧談です。それ以前の備品目録にも点字盤と記されています。では、これはいつ誰がもたらしたものなのか、謎です。手掛かりがありましたら、お教え下さい。

なお、京都府立盲学校資料室には1892（明治25）年春の卒業式で読み上げられた答辞の点字原稿が、京都府立の歴彩館には同年2月に書かれた点字の文章が保存されています。京都市立歴史資料館は1891（明治24）年夏に作成された点字一覧表を館内で発見しました。それは、島津製作所が点字器を製造したことを裏付ける文書でもあり、驚きましたね。掘り起こしの余地はまだまだありそうです。幸運にも掌に載るのは1枚の小さな軽い紙であっても、歴史の手ざわりは心地よく、先人たちと対話できる喜びにわくわくします。

4 「暁天の星」の時代とは ―東西の共同研究―

日本点字が産声をあげた年、東京と京都以外では、高田と横浜に、訓蒙学校・訓盲院があるのみでした。見方を変えれば、その後に創立された学校は、ほぼ最初から点字を採用する条件に恵まれていました。しかし、ごくおおざっぱに括ると、明治の終盤まで、全国の盲学校づくりは停滞します。そこで、明治20～30年代の点字研究は、東京・京都の2校など、僅かな教員が担って進めるしかなかったのです。表記法についても、指導法についても、点字器の改善についても、核となる「東西の一致」がどうしても必要でした。

両校の交流は、教育課程や指導法を磨くこと、施設・設備の研究、さらには点字書籍の郵送料改善策など多岐に亘りました。京都府立盲学校には、創立から戦後までの学校日誌類や公文書の綴りが残されています。その中に、ある年は京都から東京へ、次の年は東から西へ、複数の教員を派遣しあって共同研究を進めたと臨場感を湛えた記録があります。時には鳥居院長自身が一ヶ月近く上京し、寄宿舍に泊まらせていただいて東京の実態・実践を調査し、盲・ろう分離をめぐる意思統一を行っています。打ち上げの懇親会やお土産まで書かれています。

中村望斎が点字で「小遣い帖」をどのように書けばよいか考え、私案を綴った手紙が残されています。縦横の欄をどう揃えるかについてのささやかな考察なのですが、

細部まで扱ったんだなと感心させられます。そうした往復文書の中に「暁天の星」という鮮やかな4文字が飛び出します。「点字を知る人は、夜が明けたあとの空に見える星よりも少ない」という切々たるフレーズです。だから、力を合わせて研究しようという呼びかけでした。決して嘆きではなく、たゆまぬ研究と研鑽と実践に向けた強靱なメッセージだったのだと思えてなりません。

5 さこんじょうこうのしん 左近允孝之進・マスエの仕事 – 3種類の『点字独習書』 –

1899（明治32）年には拗音符号が採用され、2年後には、日本の点字が政府官報に掲載されました。官報は、国会図書館のデジタルコレクションに収められていますので、一度確かめておかれるのも一興でしょう。次いで、やっと文部省から『日本訓盲点字説明』が出されたのが1911（明治44）年です。

その間、文部省より6年も早く、兵庫の左近允孝之進・マスエが『盲人点字独習書』を出版しました！この『盲人点字独習書』は、当時まだ就学率も10パーセントにも満たないという状況下で、盲学校に入学することもできない盲人・未就学の盲児に「点字があるんですよ！」「一人でも学べます！」と熱く伝える志の噴出でした。この『独習書』に3つもの種類が見つっています。現在、非常勤として勤務している大阪府立大阪北視覚支援学校の資料室に現存します。

①1906年版と②1912年版と③1914年版です。①は初版で孝之進が発行者です。②も著作者は孝之進ですが、既に故人となっていたため、マスエ名義での発行です。①②が墨字本なのに対し、③は点字本（マスエ発行）で、表紙に『盲人点字独習書神戸六光社蔵版』（六甲ではなく、六つの光）とあります。内容は、尋常国語読本を点訳して載せた、触読用の点字テキストです。

当事者・孝之進と同伴者・マスエを讃え、惜しみない敬意を表します。

6 点字投票の実現 – 長崎照義と中村京太郎 –

衆議院議員選挙法・同施行令に「点字投票」が法定されたのは、1925（大正14）年でした。世界初の快挙とされています。以来、5年後には100周年を迎えます。諸外国の場合、投票は○×一名前を書く必要がない一方式が多いという事情もあったようです。ですが、それはそれとして、点字での投票が認められているのは主権者性を承

認する証しとして極めて重要です。普遍化していえば、まさに不易としての「人間の尊厳」への欠かせない快挙でした。

ただ、私は、^{しんよんほん}慎英弘氏の『点字の市民権』などから学んで、何度か発信してきたのですが、法律の条文上は未だに「点字を文字とみなす」という規定に留まっています。「手話言語条例」の制定運動からも教訓を引き出して、「点字は文字だ！」と高らかに掲げる法律を手に入れたいものです。

7 点字文法の検討 ―教科書・点訳運動―

日本の点字は盲学校から育ってきました。明治期には、教材を手から手に書き写して勉強しました。東京・横浜・京都の順で点字製版機を輸入したのちに、点字印刷が可能となり、機関誌や新聞づくりが急速に普及しました。点字毎日編集部や文部省が点字教科書の製作に取り掛かる時代もたぐり寄せました。点字図書館も立ち上がり、点訳奉仕に携わる方々も増大します。

こうした変化をうけて、「点字表記法のより詳細な研究と統一」が求められるようになりました。それを基盤に、近畿の盲学校や関東の盲学校などで点字文法の検討が始まりました。戦前に、そこまで到達していました。

8 点字表記法の練磨 ―日点研・日点委の業績―

その後、日本点字研究会が誕生します。けん引したのは鳥居篤治郎会長でした。優れた同志が各地にいらっしゃったことは申すまでもありません。続いて、日本点字委員会が立ち上がり、すでに『50年』を重ねてこられました。

私の盲教育史探訪は、明治から敗戦あたりまでが主で、点字をめぐる戦後の推移はとらえきれていないのが正直のところ。鳥居先生とはお会いしたこともなく、文章と録音に親しんだのみです。京盲中学部で英語を担当なさっていた永井昌彦先生の点字に対する厳格な論建てや指導法に教えられました。自分の属した高等部の先輩から、赴任直後、「1学期の中間試験は自分で点訳しなさい」と半ば命じられました。放置ではなく手厚い指導が伴いました。小学部には、児童が点字器で打っていくさなかにその間違いを教卓の側からみつけ、ただちに指導できるベテランがおられました。現在、同じことを同じように期待することは難しいのですが、汲み取るべき何かがあ

の時代にはあったような気がします。

鳥居篤治郎の口癖であった「点字良心」という言葉を皆様にもプレゼントしたいと思います。アーミテージに由来するようです。現在、日本点字委員会公式ウェブサイトのトップに掲げられている「読みやすく、書きやすく、わかりやすい点字」というスローガンに、鳥居の悲願が確かに息づいています。

9 「満天の星」のイメージ – 楽しく・役立つ・柔軟に –

京都府立盲学校で戦時中から戦後にかけて勤務した福田 與^{あたえ}先生に『満天の星』と題する著作集があります。明治期に鳥居嘉三郎や小西信八の下で修行し、後に松江盲啞学校を開いた、私の愛する福田与志によく似た名前ですが、親戚でもないようです。「満天の星」は、與先生の著書から頂戴しました。

夜空いっぱい、まさにキラめく星々のイメージ。それは、地上のあらゆる願いをすくい取り、私たちを励ますかのようです。

「星」は、点字の機関誌や新聞の題に、「むつぼしのひかり」「星影」「ひかり」「兼六の光」などとしばしば用いられてきました。バルビエのころ少し寂しげだった「夜の文字」が、「まさに満天にちりばめられた星たち」に育ちました。

その点字の影（光という意味も持つ）が少し薄くなっていると嘆く声もあります。これには、事実も反映しており、捨ておいていい状況ではありません。しかし、だからこそ、点字の魅力をどう発揮するのか、目標を正面に据えた努力が必要なのでしょう。その有効な処方箋をお示しできるわけではないのですが、若干。

☆1 点字の魅力をどう磨くか

点字は、目の見えない人・見えにくい人に役立つ文字です。でも、それだけでしょいか。目の見える人にとっても、つまり、誰にも役立つツールとして鍛え直す余地はないのでしょうか。バリアフリーを実現するだけでなく、ユニバーサルデザインの基盤となる可能性が浮上しつつあるとさえ感じられます。シャンプーやリンスのあの凸点などよりも繊細なエンボスとして。

☆2 点字を社会にどう浸透させるか

家のなかにも、街にも、あらゆる場所とモノに、点字が貼られているという姿を構

想してはいけなんでしょうか。大きな点字を書ける点字器が創作されたことのなかにも、不易と流行の融合が伺えます。長谷川貞夫氏による体表点字は新しい流行であるとともに点字のもつ不易を実現する挑戦なのではないでしょうか。「どこでもドア」ならぬ「どこにも点字」。あるいは、点字そのものに代わるデジタルの符号にも期待しています。さらに言えば、企業や行政で働く人皆が「点字入力」をマスターすれば世界は根っこから変わると夢見ている私です。

最後に、私をゆさぶり、愛おしさを感じさせた珠玉の言葉を二つ。

☆1 毎日新聞社 『日本点字器事始 仲村謙次の証言』（点字）【墨訳・岸】

「点字器の一マスにある六点を打ち出す技術は、金槌で一点ずつ打つ、全くの手仕事だったのです。三十二マス普及型でも二行ありますから、点の数は三百八十四点。紙押さえのページ四マスを加えると四百点を越します。これを荒打ち、中打ち、そして仕上げ打ち二度、つまり一台の点字器だけでも、一千数百回以上も金槌で打たねばなりません。」

☆2 「先生、やっと僕の文字を確立できた気がします」

点字大好きの人に増えてほしいですね！ ご清聴、ありがとうございました。

日本点字制定130周年に寄せて

日本点字委員会では、2020年が日本の点字制定130周年にあたることを記念して、「日本の点字45号」に特集を組み、その中で皆様から原稿をお寄せいただいた。内容としては、130周年の節目に、点字と私、これからの点字、表記について、点字の歴史に関する事など、ご自由にお書きくださるようお願いした。この特集では、下記の6編を掲載させていただくこととした。

点字が点字になるために

木下 知威^{ともたけ}

この130年、盲人は点字とともに長い旅をしてきた。明治なかばから盲人の当事者や全国各地の盲啞学校によって点字の本・雑誌の印刷が推進され、盲人たちのコミュニティが広がり、かれらの活動が記録されていった。

ところで点字は英語でブライユというように、考案者であるルイ・ブライユの名を冠している。現在の点字のもととなった、六つの点で構成された点字である。これがいつ日本にきたのか。いつ、誰がブライユを「点字」と呼ぶようになったのかという問いがある。これについて大河原欽吾『点字発達史』をはじめ、盲教育史で明快な答えは得られていない。ここにおいて示すことで、日本の点字制定130周年を言祝ぎたい。

ひとつめの問い。点字が日本にやってきたのはいつなのか。それを推論するために重要な現物が2つ残っている。ひとつは、東京の筑波大学附属視覚特別支援学校の資料室が所蔵する、ニューヨーク・ポイントの冊子である。もうひとつは、東京の国立国会図書館が所蔵する、文部省の手島精一が1878年にロンドンから持ち帰った点字のサンプルである。

前者から説明しよう。これは横長で表紙に「瞽者讀本」と朱で書かれた薄い点字の冊子である。ニューヨーク・ポイントは19世紀のアメリカで使われていた点字であり、現在の点字を横にしたようなフォルムを持つ。

なぜ、これが筑波大学附属視覚特別支援学校にあるのか。それはこの冊子に、3つ

の情報が書き込まれていることが重要だ。それは東京書籍館の蔵書票、教育博物館印、文部省の寄付印である。これを整理することでどんな運命を辿ったか浮かび上がってくるだろう。東京書籍館は1872年から1877年までに存在した図書館であるから、この冊子が書籍館に入ったのもその頃に定まるだろう。また、教育博物館印のある教育博物館は1877年、文部省が所轄していた東京博物館から改称したもので名前の通り、教育・教材を国内において普及するという目的を持っていた。1881年7月に「東京教育博物館」となるまで存続した。この印には受入登録印も添えられており、受け入れられた日がわかるのだが字がかなりかすれていて読めない。ただ、「明治十年四月」と読めそうで、1877年であろうか。この頃に書籍館から教育博物館に移された。

次に文部省の寄付印は「寄付 明治二十二年十一月十五日 文部省」とある。これに近い出来事として、1889年11月18日に石川らが高等師範学校に出向いて教材103点を引き継いだという話がある（『東京盲学校六十年史』186頁）。逆に高等師範学校の視点でみると、同年7月には教育博物館が同校の所属となっている。しかも博物館は前年、陳列品を一般教育に関するものに限定している（『東京高等師範学校沿革略志』41-42頁）。そうならば障害児教育に関する教材をどう扱うか問題となり、東京盲啞学校に移管したと想像される。よって、この冊子は東京書籍館、教育博物館、高等師範学校、東京盲啞学校を経由して現在に伝わったとみてよい。

後者は、イングランドにおける盲人団体であるB F B Aで発行された1877年版のレポートに、ブライユの六点点字のアルファベットの見本が同梱されているものである。B F B Aは現在の英国王立盲人協会（R N I B）として存続しているが、現地調査したところ、このレポートを所蔵していなかった。この見本には太い点筆と浅い溝の点字盤を使っているためか、点字をそっと撫でるとぷっくりした点字の印象があり、今のスマートな点字と違うものだ（次ページ写真）。

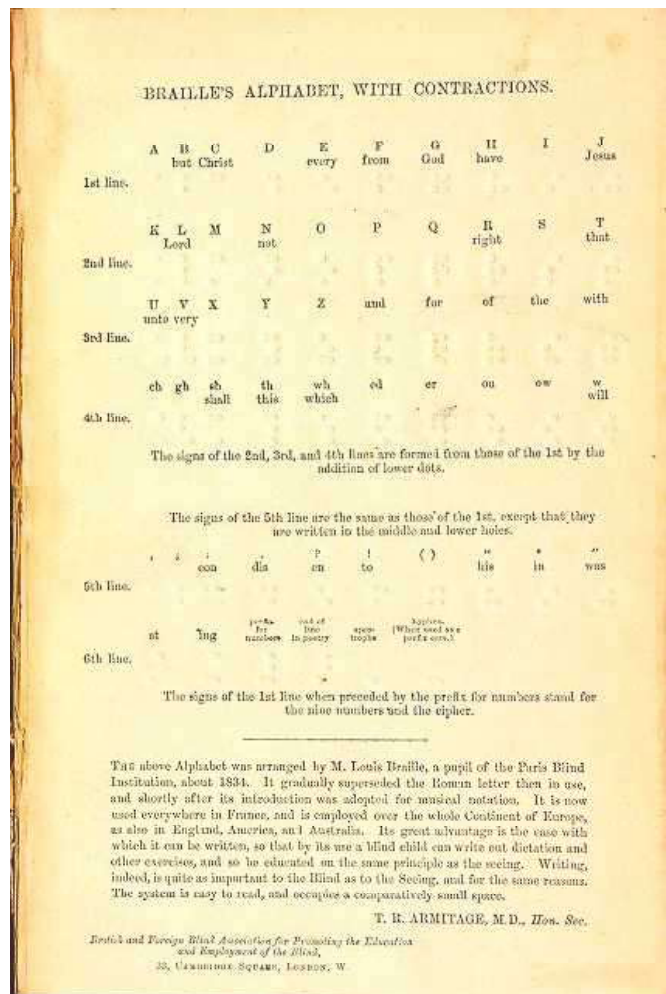
このレポートには1879年3月5日に文部省から交付を受けたことを示す教育博物館の受入登録印がある。このことを検証するうえで、注目したいのは前年の1878年にはパリにて万国博覧会が開催され、日本政府から派遣された役人に手島精一（1850-1918）がいたことである。彼はパリ滞在中に教材購入のためにロンドンを訪問し、1879年1月に帰国しているのである。かつ、B F B Aを主宰していたトーマス・ロードス・

アミテージ（1824-1890）は1879年2月にロンドンで開催された講演会で、「数ヶ月前に地図、書籍、教材などについて日本政府から照会を受けた」という旨の発言をしている。ここから手島とアミテージの行動と受入登録印は矛盾しない。まとめると、1872年から1877年の間にニューヨーク・ポイントが、1879年にブラユの六点点字の現物が日本に到来していることになる。

ふたつめの問い。いつ、誰がブラユを「点字」と呼んだのか。素朴な疑問にきこえるが、盲教育史でははっきり検討されてこなかった。答えとしては、教育博物館で洋書を扱った人たちだと考えられる。

注目したいのは、東浦房次という人物が教育博物館で洋書を担当したことである。東浦は英語通訳として名高い名村五八郎（1826-1876）の門下生で、1866年に箱館洋学所の教師となり、明治になった時には新政府の外国局といういわゆる外交部門に属したことから、相応の語学力があったとみてよい。

また、教育博物館は1881年に『教育博物館案内』という博物館の展示品を紹介する本を発行している。この本によれば館内に障害児教育の展示ブースがあり、盲教育では「凸字書」「點字書」「點字凸起具」などの解説があり、文字を浮き上がらせた表記形式である凸字と点字が区別されていたことがわかる。よって、教育博物館では東浦をはじめとする英語を解する関係者たちのもと、洋書を整理する中で「点字」という言葉がすでに作られていた。しかし、この「点字」はあくまでもブラユのひとつの表現にすぎなかった。例えば、1879年に発行された雑誌『教育新誌』には、“Braille Reading and Writing”を「凸起文字」として紹介する記事がある。それ



に1884年のロンドン衛生博覧会において、日英両国の出品物を交換した際に、イングランドからの点字用具の名称は「ブレイル氏点凸字書キ方用具」と点字とも凸字とも判断できない呼称になっている。この曖昧な語句の原因は六点を凸とするか、点とするかという認識と言語の問題に起因する。日本の点字制定以前に翻訳を通じてブライユの特徴を捉えるという概念化の過程があったのである。

まとめよう。石川倉次たちによる点字の翻案と制定が成り立つには、その1890年以前の1870年代に点字の現物が来日し、それをもとにその名称と特徴を日本語として記述することで理解していくという概念化が不可欠だった。石川たちはブライユを日本語に対応すること、点字が点字になるための総仕上げをしたということだ。

ここで言及したことは「点字以前：18-19世紀の日本における盲人の身体と文字表記技術の交差」『一滴』（26号、2019年）という論文で詳述している。関心のある方は手に取ってほしい（テキストデータは木下のウェブサイト <https://www.tmtkknst.com/> で販売している）。

点字との旅はまだ途上にある。点字に携わるみなさんの人生が、点字とともに開かれていきますように。

（資料提供：国立国会図書館関西館）

紙の点字からデジタルへ

浅川 智恵子

私が初めて点字に触れたのは盲学校高等部の入学式でした。全盲の女性の先生が点字を読んでいるのをみて、目が見えないのに文字が読めるということに感動すると同時に、自分にも同じことができるのか大変不安に感じたことを今でもはっきり覚えています。案の定、盲学校時代は点字をマスターするのに大変苦労しました。書くことはすぐにできるようになりましたが、読むスピードがなかなか向上しなかったのです。これは今でも苦労しています。点字を始めたのが高校生になってからだったことが関係しているのかもしれませんが。大学受験の時には点字の参考書がないことに苦労し、大学時代には専門的なテキストの点字を準備するのに本当に苦労しました。点訳ボラ

ンティアの方に急ぎで点訳もして頂いたのですが、時には兄弟をつかまえては読んでもらって自分で点訳もしていました。とてもつらい学生時代の思い出です。大学の授業中は打鍵音が大きいため点字タイプライターを使うことができず、点字板を使ってノートをとっていました。当然、十分にノートをとることはできませんでした。墨字ではポケットサイズの小さな英語辞書が点字になると100分冊にもなることには大変驚きました。棚いっぱいの百科事典で単語を調べているところを想像してみてください。それも晴眼者であればいつでもどこでも調べることができる小さな辞書の内容です。こうした経験を通して私は勉強することから逃げるようになったように思います。

ここまでを読むと私は点字に悪い印象しかもっていないように思われるかもしれませんが、このような苦しい思い出が、後の私の人生を変えるきっかけとなったといっても過言ではありません。コンピュータが登場し始めた1980年代初頭、IBMの研究所で学生研究員として、英語の自動点訳システムを研究開発する機会を得ることができました。テキスト化された英文を自動的に二級英語点字に変換し、当時製品化され始めた点字プリンタで出力するというものでした。開発しながら自分の大学時代にこんな便利なものがあれば、もっと自由に英語の専門書を読むことができたのにと悔しく思いました。そしてコンピュータを使えば点字の作成や共有の仕組みを大きく変えることができるのではないかと考えるようになりました。

1985年日本IBMに入社後は点字のデジタル化に取り組みました。それが現在のサピエ図書館の前身である「てんやく広場」を開発するきっかけとなったのです。点字をデジタル化するにあたり、初めに取り組んだのは点字編集専用ワープロの開発でした。80年代後半はまだパソコンが出始めたばかりで、当時の点訳ボランティアの方々はパソコンを使用した経験がありませんでした。そのため違和感なくパソコンでの点訳をはじめられるように、点字タイプライターと同様の操作性を実現しました。パソコンの電源を入れると点訳に必要なメニューだけが表示され、点字入力方式もカナタイプ方式とパーキンス方式の両方を提供しました。そのうえでパソコンだからこそ実現できる便利な機能、たとえば、点字を画面上でカナとともに表示するといった機能を実現しました。

このシステムは点字編集システムBES (Braille Editing System) と命名され、日本の点訳ボランティアの方々に標準ソフトウェアとして利用されるようになりました。

た。B E Sが実用化された後、日本各地の点字図書館で講習会を開催しましたが、様々な年齢層の方々が簡単にマスターされていく姿を見て開発者一同大変嬉しく思いました。

次に取り組んだのが、点訳されたデータをネットワークを介して共有するためのシステムでした。全国の点字図書館やボランティアグループの拠点を結んでタイムリーにデータを共有すれば、それまで行われていた重複点訳が回避できると考えたからです。たとえば、当時のラジオ講座のテキストは、複数のユーザが利用していたため、全国各地で複数の点訳ボランティアが同じものを点訳していました。ベストセラー本は点訳や音訳に数か月以上かかるだけでなく、完成後も順番がくるのを待つ必要がありました。

点字のデジタル化により日本の点字図書館のサービス体系は紙からデジタルへと大きく変わりましたが、その変革は簡単なことではありませんでした。デジタル化された点訳データを、ネットワークを介して共有するためには同時に書誌データを持つ必要がありました。B E Sのファイル内にそれらを保持するために必須項目を確定したり、書誌データ入力のためのインターフェースを新たに設計したりとB E S開発後もデジタル点字図書ライブラリーの構築に向けて多くの課題に取り組みました。

この間、全国の点字図書館や点訳ボランティアの方々と多くの議論を行い、数えきれないくらい長い時間を共にしました。今思い出しても素晴らしい経験でした。共に作り上げた当時の担当者の方々のご尽力なくしててんやく広場の成功はありません。初めててんやく広場に点字データがアップロードされたときの感動は今でも忘れることができません。当時は通信速度が現在より100万倍遅く、一冊の点訳データを送信するのに一時間ほどかかったように記憶しています。初めててんやく広場にデータがアップロードされたとき、関係者一同で喜びを分かち合ったことがとても良い思い出です。その後てんやく広場が視覚障がい者ユーザに開放されたとき、一人のユーザの方から「街角の本屋さんに立ち寄るといのはこんな感じなのだった」という素晴らしいコメントをいただき、開発メンバーみんなで喜んだことを今でも覚えています。

私が1980年前後の学生時代に苦労した書籍へのアクセスは、2020年の今、すっかり解決されています。サピエ図書館にアクセスすればいつでも点字図書や録音図書をダウンロードして読書を楽しむことができます。電子書籍やインターネットの情報など

は簡単に自動点訳することができ、点字ディスプレイ上で読んだり、点字プリンターに出力して紙の点字で読むことができます。辞書の検索もコンピュータを使えば一瞬です。点字メモ機を使えば授業中でも打鍵音を気にすることなくいつでもノートをとることができます。たった、30年で点字を取り巻く世界は大きく変わりました。唯一解決できなかったのは私の点字を読むスピードかもしれません。スピーチをするときなどはメモをすらすら読むことができないので、前日はほとんど暗記をする勢いで読み込んでいます。しかし、どんなに読むスピードが遅くても点字がなければ私の仕事は成り立ちません。特にプレゼンテーション資料・英語の文献・専門書は点字でじっくりと読みます。これからもデジタル化され便利になった点字を最大限に活かして、自分にできることに取り組んでいきたいと思っています。

視覚障がい者にとって点字と音声どちらが便利かという質問を受けることがあります。私は、用途が異なるため比較できないものだと考えています。音声では聞き流してしまうことも点字ではしっかり確認しながら「読む」ことができます。晴眼者にとっての墨字と同じように、多くの情報を正確に取得するために点字は重要な役割を果たしてきました。今年は日本の点字制定130周年の記念すべき年です。日本に点字を導入した先駆者の方々に感謝すると同時に、今という時代を生きる者として、文字を「読む」貴重な手段である点字を大切にし、継承していきたいと思います。

点字にまつわる三つの危惧

大藪 眞知子

点字に関わる仕事に就いて、もはや40数年になる。いわゆる点字離れ現象については、10数年前から少しずつ感じるようになったが、ここ1、2年、それに加えて気がかりな事象を身近に感じるようになった。せっかくの機会なので、思ったまま感じたままを書いてみることにした。何らかの問題提起になれば幸いである。

昨今、視覚障害者情報提供施設において、視覚障害者職員を雇用しないところが多いようだ。それだけでも大問題だが、求人があったとしても応募してくる若者が少ないと聞く。「施設」ではなく、公務員や一般企業への就職希望者が増えているのだら

う。日がな一日対面校正をしているだけ(?)の仕事は面白味のないものに思えるのかもしれない。AI技術の進展により、いずれはなくなってしまう職種だと思っている向きもあろう。しかし、そんな時代に向かっているからこそ、ユーザーとしての関わりが重要になるのではないか。

次に、公共図書館だけでなく、点字図書館等においても、点訳講習会を軽視する傾向があることだ。講習会の予算が出ないので、開催できないというケースも実際にある。いわゆる「上」は、自動点訳ソフトのことなどを聞き知って、もうボランティアは不要だと考えているようだ。最初の例と同じく、点訳者もより高い技術が要求されているはずである。

最後に、若い点字ユーザーの点字本上での検索能力が低下しているのではないかという点である。もちろん個人差はあるが、ページを繰ること、見出しを見つけること…、いろいろな場面でそれを感じていた。ある教育関係者から聞いたことだが、たとえば大学などでは、紙に打たれた点字ではなく、データ化された点字をピンディスプレイで読んで学習することが多くなってきているという。これは墨字使用者が、紙の書類・書籍より電子書類・書籍に慣れ親しんでいることと似ているが、結果はやや異なるように思える。選び取る範囲が狭まり、全体像が見えにくいのは、圧倒的に点字の方ではないだろうか？ 晴眼者に点字指導を行う際、私がいつも言っているのは、「指で読む点字は検索の点ではかなり不利だから、少しでもそれを補える点字を心がけてほしい」ということだ。

技術の進歩は私たち視覚障害者の書誌情報環境を大きく進歩させた。それは心から喜ぶべきことである。しかし、ここで点字の原点に立ち返り、見つめ直さなければ、本当の点字離れを招いてしまうのではないかと危惧するのである。

点訳者から教える立場になって考えること

福島県立視覚支援学校教諭 渡邊 寛子

今思えば、30年前の日本点字100周年の頃には、私は弱視で、大学の点訳サークルで点訳していたのでした。学部内に二人の全盲学生がいて、急がない専門書を共同点

訳していました。ライトブレーラーでの両面うち、1枚に5箇所以上のミスでうち直し。先輩が後輩の校正をしますが、あっという間に読み上げながら触読校正してくれる全盲学生の登場を部室でみんな心待ちにしていました。彼らがルール、「慣習的に僕は続けるね」なんて言ってくれると安心、顔の見える点訳でした。切るか、続けるか、それがわからないうちは、一步も進まないこともありました。パソコンがない時代、ルレットで作図したり、英語点訳を覚えて大学入試点訳に加わったり、卒論の墨訳を万年筆でしたりもしました。

生まれつき弱視でしたが自覚がなかったので、黒板は見えなくても、統合教育で見えているフリして県立高校の国語科教員になりました。出産で先天性の緑内障が悪化して失明、生活訓練を受けて、全盲教員として盲学校へ転勤・復帰しました。そこでは、前年に自分が受けた点字訓練が最初の仕事でした。高等部普通科から切り替える生徒を皮切りに、5歳から50代まで、点字導入に携わってきました。

触読17年目の今年度は、全盲女子の担任となり、提出されるものを墨字に起こしてパソコンに打ち込むのも苦にならなくなりました。「地域の学校へ上がる前に点字を教えてほしい」というニーズに応えて、週2回、震災直前まで指導した子が、小学5年で本校へ転入、中学部3年の時には、国語を私が担当し、いよいよ高等部で担任となりました。切れ目なく引き継がれてきた点字での読み書き能力の向上、中高一貫？の強みを活かして、一年早く前倒しで国語で伸ばす点字力、すなわち、より速く、正しく、主体的に、漢語を含めた語彙力の養成、文脈を読み取りながらの正しいマス空け、レイアウトを意識して自分で考えるノートテイク、日常生活の中で楽しく実体験を積みながら身につく表現力……、チームの一員として視覚障害教育の専門性を継承すべく取り組んでいます。

ここ数年、高等部の生徒会誌や、図書便りを編集しています。全盲国語科教員が編集すると、点訳しながら、墨字の誤字脱字を見つけ、文章のねじれなどを直し、墨字よりも点字版の方が先にできあがるという傾向があります。

今年度、福島県視覚障がい者福祉協会が創立70周年を迎え、記念誌を発行します。編集委員の末席を汚す身として、原稿をつないで点訳し、墨字の不具合を修正しました。印刷業者に墨字原稿を渡す前に、点訳ができ、私の手を離れて、ネイティブユーザーの校正段階へと進みました。その中でも、点字原稿は私が墨訳したため、音訳担

当者へは、人名、難読語リストをつけました。「私」を「会長さんの原稿はすべて『わたくし』で、『あとに』でなく、『のちに』、その間は『そのかん』……」

書き手の真意を知っているからこそ、品格を落とさない点訳・音訳。ひいては、出題の意図がわかるからこそそのノイズを省く試験問題の点訳、つまり「墨字通り」では、触読者が不利になることを避ける技術が点訳の専門性につながります。

子供たちの素朴な疑問が教員を育てます。誰が読むのかを考えて、発達段階と伸ばしたい力、到達点を見越した「読みよく、書きよく、わかりよく」を意識しています。

先達の知恵と苦闘の集大成である点字。その歴史と魅力を伝え、心も体もたくましい点字ユーザーを育てる使命を心に刻みながら。

点字とともに

高洲 由美子

日本点字が制定されて、今年で130年、石川倉次先生によって考案された点字は、今もなお私たちが使っています。おめでとうございます。心よりお祝いと感謝を申し上げます。

私が点字と出会ったのは、今から48年も前の話です。

盲学校小学部2年生に転入した私は、まず点字の読み書きができないことには何も始まりません。何とかゆっくりながらも書けるようになったものの、読むのは難しく、いくら指で触っても分かりません。読めるようになるまでに人の2倍、いや3倍はかかって家族の協力もあり、夏休みが終わるころには少しずつ読めるようになりました。

点字の読み書きができるようになると、教科書以外にもほかの本を読みたいくなりました。担任の先生に点字の本はどこに売っているのか聞くと、私の苦手とする算数の勉強をするようにと言いながらも、ライトハウスの住所を教えてくださいました。両親に買ってもらった本を私は夢中になって読んだものです。

年に1回、学校では点字競技会があり、徐々に速くなっていったように思います。

私はライトハウスの電話交換を卒業後、箕面に通っていました。箕面へ仕事に行く

ものの、私の住む豊中でも何か活動できる場が必要だと思い、パソコンをする人たちの集まりにも行ってみました。結局、結成してまだ日も浅い音楽グループに入りました。

今は小編成の音楽グループで私が担当するのは、リコーダーを吹き、司会をし、点字の詩や昔話などの読み聞かせをすることです。

でもコロナの影響で休止していますが、またいつか再開できることを信じ、練習に励みたいと思っています。

8年前に私は地元の福祉会に入りました。視覚部に入れば大阪府の点字競技会に参加できることが分かり、手続きをしました。それまでにも講座で一緒になる人から誘われていましたが、どうしようかなと迷い先延ばしにしていました。次の年に、点字競技会に参加したことによって、点訳ボランティア講習会の講師にならないかというお誘いがありました。私は点字に関わる仕事がしたいという強い想いがあり、願ってもない話が来たので引き受けることにしました。

秋の点訳ボランティア講習会は、10月から始まります。

私は大好きな点字の技術を磨き、点字を一人でも多くの人に広めようという想いもあり、点訳講習会の仕事をさせていただいているのですから、これほど嬉しいことはありません。

かけがえのない点字にありがとう。これからもよろしくお願いします。

点字に感謝

松浦 敬子

幼いころからあまり視力は良くありませんでしたが、人生半ばまでは子育ても仕事もこなし、人並みに過ごすことができました。ある日、眼科医から網膜色素変性症の難病だと告げられました。何とかしなければならぬと悩みに悩み、名古屋総合リハビリセンターにおいて点字の五十音の習得を開始しました。お蔭様で点字本をお借りして指で読めるようになりました。今では点字は、私の生活の一部として役立っています。必要なことはメモ書きができるようになって、とても助かっています。

今、完全な失明となって、目の前が全く消えています。そんな私にとって、日々点

字にどれほど助けられているか……。凹凸でできていて、触れて分かる点字の文字を頼りに、記録したり、知識を得たりしており、ありがたく感謝しています。日常生活にも必要不可欠となり、感謝の日々です。

点字は住まいの中で、いろいろな電気器具、トイレ、洗濯機などなどに点字を貼り付けて利用しており、とても助けてもらっています。

また市街地のあちこちにも点字があり、外出したときに助けられています。

ルイ・ブライユの発明した点字をもとに、今から130年前に石川倉次先生が、日本語の「あいうえお」を考案されたと伺いました。ずいぶん昔なんですね。その間、私のように多くの目の不自由な人たちが、点字に助けられ勉強や日常生活を続けてきたのでしょう。すごいことだと思います。戦前からの大きな遺産として、点字はこれからも視覚障害者にとってありがたい道標^{みちしるべ}として点字が残されていくでしょう。

現在の点字を考えてくださった先人の方々、点字を今の私たちにまで伝えてくださった方々に熱くお礼申し上げます。この機会に、点字をもっと私たちの生活の中で利用していきたいと思います。

日本点字制定130年、おめでとうございます！そして、点字に感謝！！

第56回総会および研究協議会報告

当初「研究協議会並びに第56回総会」は、2020年5月30日・31日、横浜あゆみ荘において開催する予定であった。しかし新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から中止し、第56回総会審議事項を書面等によって行うこと、および委員4分の3以上の賛成によって決定することの可否について、メールによって委員に諮った。

その結果として、① 2019年度事業報告および決算、② 2020年度事業計画および予算について、書面または電磁的方法によって表決し、全委員（25名）からの承認を得ることができたため、6月13日に総会で決定したものとみなした。

主な承認事項

（１）事業報告関係

①『日本点字表記法2018年版』電子版について、11月1日に点字版はブレイルメモのみで閲覧可能な形式で、墨字版はコピーや印刷機能を制限して、購入者名の入ったPDF形式での販売を開始した。

②『むつぼしの輝きを求めて－日本点字委員会50年のあゆみ 1966～2016』を、11月1日に発行した。点字版はデータをホームページに掲載した。墨字版は希望者に販売している。

③『数学・情報処理点字表記解説 2019年版』について、墨字版・点字版を同時発売した。

④『試験問題の点字表記』について、渡辺昭一委員・長岡英司委員・和田勉事務局長により、各種試験問題の点字版の収集やデータ化を進めると共に、改訂すべき点について、意見交換を行った。

⑤「医学用語の点字表記」の見直しについて、渡辺昭一委員・岩屋芳夫委員・白井康晴委員・小野明男事務局員・鈴和代事務局員によって協議を行い、素案を事務局会議で検討した。

（２）事業計画関係

①『理科点字表記解説2019年版』を発売する。

②『試験問題の点字表記第２版』（2007年発行）の改訂版について、検討委員会の進捗状況を踏まえて発行計画を立案する。

③日本の点字制定130周年の記念すべき年にあたり、イベント等の企画を検討する。

④「医学用語の点字表記」（2011年発表）について、『日本点字表記法2018年版』の内容に沿った見直しを行い、早期に改訂案をまとめる。

⑤社会情勢および必要性に応じて、年度内に研究協議会に相当する研究協議等を行う。

※委員の交代について

盲教育界代表委員、中村恒子氏（山形県立山形盲学校）から渡邊寛子氏（福島県立視覚支援学校）に交代した。

2020年度研究協議会報告

2020年11月１日（日）13時30分～16時、すみだ産業会館（東京都）において標記の研究協議会が開催された。参加者55名。司会・白井康晴委員

（１）宮村健二委員より「複合名詞の２拍以下の成分の切れ続きルールの検討」が発表された。

（要旨）

2018年版は、複合名詞内部の切れ続きについて、３拍以上の独立性の強い意味のまとまりが二つ以上あればその境目で区切って書き表し、２拍以下の意味のまとまりは３拍以上の意味のまとまりの前か後ろに続けて書き表すことを原則としている。

一方、２拍以下の意味のまとまりであっても、独立性の強い意味のまとまりは、意味の理解を助ける場合には後ろまたは前の独立性の強い意味のまとまりとの間を区切って書き表してもよい、ともしているが、２拍以下で独立性の強い意味のまとまりにはどのようなものがあるかについては、系統的で明確な言及はなされていない。そこで、複合名詞の２拍以下の成分の切れ続きルールの前進を目指して整理を行った。

(2) 日点委事務局より、「医学用語の点字表記について第2版(案)提案について」が報告された。報告者：岩屋芳夫委員

(要旨)

第55回総会ならびに2019年度研究協議会の決定に基づき、2011年発行の「医学用語の点字表記について」の内容と、『日本点字表記法 2018年版』との関係を明確にする目的で、このたび第2版を製作した。「表記法」の規則の変更を反映するとともに、医学用語の例の分かりやすさ等を考慮して、以下のように最小限の変更を行った。

①ダイ数8□ノーシンケイ（第8脳神経）←ダイ外大大VIII□ノーシンケイ（第VIII脳神経）

②カンケツセイ□ハコー（間欠性跛行）←カンケツセイ□ ハコーショー（間欠性跛行症）

③ケイケンワン□ショーコーグン（頸肩腕症候群）←ケイケンハイ□ ショーコーグン（頸肩背症候群）

また、「IV 漢方薬などの名称の切れ続きについて」において「医薬品として173品目が収載されている」と記載されていたが、「医薬品として収載されている」と修正した。

(討議)

・「ボー□セキチューキン」（傍脊柱筋）とあるが、「脊柱筋の傍ら」ではなく、「脊柱の傍らにある筋群」だから、続くのでは。また「ケイ□ジカン□カンセン」（経耳管感染）とあるが、「耳管感染を通して」ではなく、「耳管を通して感染する」の意味だから、「ケイジカン□カンセン」ではないか。意見が分かれ、議論をあとに残すこの2例は、削除するとよいのでは。

渡辺：削除することでまとまるなら、そのようにしたい。

・一般的にローマ数字で書かれているものは、点字でもなるべくローマ数字で表記することを、大切にしたい。

(3) 「『試験問題の点字表記』改訂に向けた調査・検討委員会報告」が、同委員会より報告された。報告者：和田勉委員、渡辺昭一委員

(要旨)

①「試験問題の点字表記」の調査・検討について、4回にわたり協議を行った。9種の試験問題を対象としたが、他にも、調査・検討すべき試験問題が存在すると思われるので、引き続き、本委員会及び設置予定の新委員会において、調査・検討を継続する必要がある。

②『試験問題の点字表記第2版』を2007年に発行したが、その後の種々の状況に対応するため、同書の改訂が急務となっている。そこで、調査・検討委員会を解散し、改訂のための編集委員会を設置することを提案する。この件は、総会議決事項であり、この研究協議会における意見交換を踏まえて、後日改めて、メール総会においてお諮りしたい。その際、調査・検討委員会の解散の承認とともに、編集委員会の設置並びに日点委の担当委員の承認、及びその他の委員の選任について会長にご一任いただくことを提案したい。

(討議)

- ・今回調査された以外にも、毎年小6と中3が受ける学力テスト、GTEC(ジーテック)などもあり、調査していただくとよい。

- ・試験問題の分量が多くなり、点字の検索性が重要になっている。それも含めて検討していただきたい。

- ・入試点訳事業部とも、情報共有をお願いしたい。

- ・「図表を読み取る力が求められる場面が増加している」(資料)とあるが、ソフトやプリンターの発達もあり、最近は安易に図がつくられていないか。慎重に臨んでほしい。

(4) 坂井仁美会友より、「小学部国語教科書の点字導入編について」の情報提供があった。

(要旨)

①小学校学習指導要領の改訂(平成29年告示、平成32年施行)にともない、令和2年度から小学部の点字教科書が文部科学省著作として新しく編集・発行された。

②国語第1学年には、原典教科書をもとにした点字教科書に加えて、点字の触読に習熟するための点字導入教材「点字を学ぼう」を追加している。

今回の編集・改訂における変更の主だったものを挙げる。

(ア) 最初の線たどりは、レ フ ウ メ の順で提示した。

(イ) 改訂前までに掲載していた「二つのマスを合わせましょう」という縦半マスの合成により一マスを認識する教材を削除し、当初から一マス6点を一つの単位として、指の腹で一マス6点を同時に認識し、真横に移動するような動きを確立させることを優先した。

(ウ) 左に置いた形と同じ形を、右側の二つあるいは三つのうちから探す課題を追加した。

(エ) 点字の形と字音を結びつける文字の指導に入る最初のページには、アメ ア メ フレ フレ アレ ナアニ の教材を、従来どおり掲載している。

(討議)

・以前サーモフォームで、大きなマスの中にボタン状のものを並べた導入教材があった。なくなったのはなぜか。

・小さい子だと、触図の大きい点を小さい点字に移行するのに困難があり、結びつかないという意見があり、今は用いていないのではないか。

※来年度の総会・研究協議会は、6月5日、6日、日本ライトハウスで行う予定。

(以上)

訃報

日本点字委員会の和田勉事務局長が、2021年1月5日（火）14時41分に逝去いたしました。享年56。

和田氏は、日本点字図書館勤務のかたわら、2016年6月から日点委学識経験委員、及び事務局長を務めました。『日本点字表記法 2018年版』の編集委員を、2016年10月より同書完成まで担当しました。

生前皆様から賜りましたご厚志に心から御礼申し上げます。

編集後記

皆様、お変わりありませんか。昨今のコロナ禍で、さまざまな制約を受けながらお過ごしのことと存じます。「日本の点字45号」をお届けいたします。

青松利明さんの巻頭言、および日本の点字制定130周年記念原稿は、筆者の方々の点字研究と実践の中から生み出された貴重な論考で、本号を飾らせていただきました。

2020年は、日本の点字制定130周年の記念の年にあたります。11月1日を中心に、各団体で記念の行事を開催したり、各メディアで特集が企画されたと伺っています。日本点字委員会でも、他団体と共催で、記念講演会を下記のとおり開催しました。

日時：2020年11月1日（日）10時30分～12時30分

会場：すみだ産業会館

講演①：福島智氏「点字は私の父、指点字は私の母」

講演②：岸 博実氏「＜暁天の星＞から＜満天の星＞へ 一点字をめぐる不易・流行ー」

コロナ感染防止の観点から、人数制限をしましたが、盛況のうちに終えることができました。当日の様子は、YouTubeからライブ配信されました。講演会の内容は、本号の「日本の点字制定130周年記念講演会」報告をお読みいただけたらと思います。本号には、講演のほぼ全文を掲載させていただくことができました。編集の段階では、その概要程度しか載せられないと思っていたのですが、講演者の方々のご好意、ボランティアのご協力により実現したものです。感謝申し上げます。

福島氏は、指点字がご自分の生活に、いかになくてはならないものかを、ユーモアを交えて語られました。福島氏の講演の圧巻は、指点字によるコミュニケーションの実演でした。次の講演の番を待っておられた岸氏と、甲賀佳子さんの指点字の同時通訳を介して会話をされました。甲賀さんは、福島氏が附属盲の生徒の頃からコミュニケーションに関わっておられた方です。こんなやりとりでした。

福島「岸先生はすごく、その一つ、盲人関係の文化や点字も含めて歴史を研究なさっていますけれど、どうしてそういうことをなさろうと思われましたか？」

岸「たまたま日本で最初にできた盲啞院をルーツにした学校で働いて、校内に資料室があったから、という感じです。」

福島「でも、京都盲の同僚の方はたくさんいるわけで、その中でなぜ岸先生が、というのが…。」

岸「まあ、なんとなく空白は埋めたいなあという気持ちがあったからです。」

福島「なるほど、なるほど、はい！　ありがとうございます。」

こうした会話が、私達の会話と同じようなテンポのよさで進んでいくのです。感動的でさえありました。福島氏も、みんなの協力でリアルタイムの会話に参加できるようになった喜びを熱っぽく語っておられました。

岸氏の、該博な知識と綿密な調査に裏打ちされた講演は、私達を深い点字の歴史に誘^{いざな}ってくれるものでした。その中に、こんな一節がありました。

《衆議院議員選挙法・同施行令に「点字投票」が法定されたのは、1925（大正14）年でした。世界初の快挙とされています。（略）

ただ、（略）法律の条文上は未だに「点字を文字とみなす」という規定に留まっています。「手話言語条例」の制定運動からも教訓を引き出して、「点字は文字だ！」と高らかに掲げる法律を手に入れたいものです。》

日本点字委員会前会長の木塚泰弘さんも同じような発言をしていました。2016（平成28）年6月5日、戸山サンライズにおいて「日本点字委員会創立50年記念特別講演会」が開催されました。その折、「日点委50年のいろいろ」と題して講演された木塚さんは、次のように言われました。

《現在私たちは、公職選挙法に載っている点字一覧表が50音・促音・長音・撥音だけなので、それを改訂する作業を行っています。また「点字は文字とみなす」という文言がありますが、これは、点字は文字とは別のものであるが、まあ文字とみなそうということです。それについても様子を見ながらきちんとした案として提出するつもりです。》と。岸氏の講演を聞いて、そういえば木塚さんも同じようなことを言っていたな、と思い出したのです。

この「点字は文字とみなす」については、日点委事務局会においても、市役所から点字投票に関する資料を取り寄せたりして検討した時期がありました。

思い起こせば、2006（平成18）年に当時の菅義偉総務大臣宛てに日本点字委員会会

長と日本盲人福祉委員会理事長との連名で、「公職選挙法における点字表記に関する要望書」を提出しました。それに対する文書回答は、まだ来ていません。

末筆ですが、点字の各分野でお働きの皆様のご活躍をお祈りいたします。時節がらご自愛のうえお過ごしくくださいますように。

(金子昭)

日 本 の 点 字 第45号

2021年3月20日発行

発 行 日 本 点 字 委 員 会

〒169-8586 東京都新宿区高田馬場1-23-4

日本点字図書館内

Eメール nitteni2021@gmail.com

振替口座 00100-1-42820

ホームページ <http://www.braille.jp/>
